
魔王様の大冒険

櫻井結乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様の大冒険

【Nコード】

N6218Y

【作者名】

櫻井結乃

【あらすじ】

大魔王サタン。人々から恐れられる存在。

のはずだったが、いつまで経っても勇者は城へと乗り込んでほこなかつた。

暇を持て余したサタン。中間管理職のルシファーも全然構ってほくれず、ついにはしびれを切らしてしまった。そんなサタンの取った行動は……？

プロローグ

「なあなあ、中ボスなルシファー君……俺さあ、気付いたんだけどさあ……超暇だわ」

世間一般的には「大魔王」と呼ばれている俺は、クルクルと動物の生き血が入ったグラスを回しながら、魔王城の一室でゴージャスな玉座に座っていた。

胸にかかるくらいの長さをした美しい銀髪。紅いマントに、動物の骨を細工した装飾品。大きな漆黒の翼に2本の角。“いかにも”魔王という装いである。いや、実際魔王なだけだな。

そんな俺の仕事は、城に乗り込んできた愚かな勇者共を一掃すること……だったのだが。

「勇者、全然こねーじゃん」

サタンは生き血を一気に飲み干し、タンツ！ とテーブルに八つ当たりするかのようにはグラスを置く。

「魔王の城にすら辿り着けないとか……つまらないと思わないかね、中ボスなルシファー君」

「その呼び方やめてください」

中間管理職兼中ボスのルシファーは、蒼いマントを翻し不機嫌そうに部屋を出ていってしまった。

「つれないな」

はあ、と溜め息をつく……俺は人間界を監視するモニターを覗

き込んだ。

「どいつもこいつも弱っちいな……最初のボスでさえ突破出来てる奴少ないじゃねえかよ。俺いつになつたら勇者と戦えんの？」

苛々しつつ、各地の勇者の様子を観察していると、俺の目に留まった一人の勇者がいた。

「……こいつ、可愛いな」

シルビア「ライトネス。Level 8。職業「かけだし勇者」
さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。ジャケットの下に胸元の開いた黒のドレスを纏っている。胸は小さめだが、なかなか良い形をしていた。

「俺、どうせならこういう可愛い子と戦いてえなく、んで、どさくさに紛れて乳揉んだり尻触ったりあわよくばアレをこうしてソレをああして……」

「サタン様」

「……あ？」

俺の桃色な妄想はルシファアの言葉によって遮られた。憤慨した俺はプルプル震えながらルシファアを睨んだ。

「東イリアス地方の魔物が減ってきているようです。召喚してください
さい」

「くそっ……俺は召喚術師じゃなくて大魔王だってんだよ」

この世界の設定上、魔物を増やすことが出来るのは所謂ラスボスの俺だけなのである。

「大体魔物を増やしたら余計勇者来てくれなくなるじゃん、いいよもう増やさなくて……」

「早く任務を遂行してください」

表情ひとつ変えずにルシファーはぴしゃりとそう言い放った。つくづくつまらない男である。

「ったく、しょうがねえなあ……」

俺は禍々しい髑髏の装飾をあしらった杖で魔方陣を描くと、ゴニョゴニョと呪文を唱えた。

「出ですよ！ 我が下部達！」

右腕を振り上げると、魔物が魔方陣の中心からわらわらと沸きだす。

「……出たよ、魔物」

最初こそ決めポーズ決めて「今日の召喚は一段とかつこよく決まったぜ！」とか言ってた俺も最近はずっかり飽きてこの通りである。

「ありがとうございます。では、私は魔物を東イリアス地方に送り届けて参ります」

「へーい、気をつけてなー」

……本当につまらない毎日だ。

ラスボスって響きに憧れて頑張ってるこの地位に就いたのに勇者が来なきゃなんの意味もない。

転職しようかなあ……村人あたりには……。

絶望の眼差しで見つめた先に映ったモニターの中で、シルビアの笑顔が光っている。

「……そうだ、いいこと思いついたぞ」

俺の濁った瞳はみるみるうちに輝きを取り戻し、悪戯っぽく微笑みながら人間界へと続く階段へと向かう。

「俺、魔王だってことは隠しつつシルビアの仲間になって、この城まで一緒に冒険してあげればいいじゃないか……！」

……こうして、異色の大魔王の大冒険が始まったのである。

第1話 接触

「待っててくれよ、愛しのシルビアちゃん!!」

周りにお花を散らしつつ、俺はルンロンと人間界へと続く階段を降っていた。

「サタン様」

「ル、ルシファー……!!」

「どこへ行かれるのです?」

「え、い、いや、暇だったからさあ、ちょっと人間界降りて人間共を混乱させてこようと思っただな……」

「サタン様直々参らなくても、その様なことならこのルシファーにお任せを」

「いや、いいから! 俺の出番奪わなくていいから! 空気読めよお前!いい加減!」

苛々が募っていた俺はバシッとルシファーを叩いた。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああ
sdfghjkiop;:~!@!~!~!」

ルシファーは俺の突っ込みで吹っ飛ばされて棚へと突っ込んで力尽きた。

「しまった! 俺、超強いんだ……! 軽く突っ込みを入れただけだったのに」

俺の肩書きは「ラスボス」なので、設定上、どのボスよりも強い。

勿論、「中ボス」のルシファーなんかは粉碎できる力を持っていた。「ま、いつか。うっさいのいなくなったし。あとで誰か回復呪文かけてくれるだろ」

俺はくるりと向きを変え、改めてルンルンと階段を降って行った。

……人間界。緑で溢れていて妙に空気が澄んでいる場所。
俺達魔族にとっては心底居心地が悪い。

「シルビアちゃんは確か……エイビスの町の武器屋で剣を物色していたはずだったな」

俺の下半身の剣じゃだめかな？ とか桃色の妄想を膨らませて二ヤけつつ、俺はエイビスへと向かった。

エイビスは森のはずれにある小さな町だった。所謂、勇者たちの冒険がまだ序盤の頃に立ち寄る場所だ。

「おうおう、弱そうな奴等がたくさんいるぜ……ん？」

町人が俺を見てザワつき始めている。翼と角は隠しているもの、着ている洋服や禍々しい装備品の数々を見て異端と感じ取ったのだろつ。

「おい……あいつ、なんかおかしなオーラ放ってないか……？」

「まさか、魔族？」

「いやだあ、薄気味悪い」

そんな声がちらほらと耳に入った。おいおい、町到着後二分で正体がバレかかっているぞ。

「ごちっ

その時、町の子供が俺に向かって石を投げつけた。
え？ 何こいつ死ぬの？ 俺は思わずギロリとその子供を睨んだ。

「こいつ、大魔王だ！！」

突如、石を投げた子供が叫んだ。

え？ あれ？ 身バレした。早々に。なんで？

「ま、魔王ですって……！！」

「近寄らない方がいい」

「町から出ていけ！！」

町人達みんなして石を投げてきた。

でも、全然痛くない。石程度じゃダメージ受けないし。あ、でも怪しまれないように痛がるべきか？

「やめろ！」

俺と町人達の間割って入ってきた一人の女剣士。

「余所者だからってそんな扱いするのはやめろ！」

さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。

「大丈夫か？」

胸は小ぶりだがなかなか良い形をしている。

俺の顔を覗き込むためにしゃがんだ瞬間、それはぷるりと揺れた。

「超大丈夫です！！」

俺は思わずその女剣士……改めシルビアちゃんの手の甲にキスをした。

まさか、彼女が助けしてくれるとは思わなかった。これが運命ってヤツか……！！

「うわあああ！ 何すんだ変態！！！！」

思いつきり鳩尾をド突かれはしたものの、痛くない。むしろ気持ちいい。

「あ、ソレもつとやっていいです」

「うわあああああ！ 何こいつケロツとしててキモい！！！！」

後ずさるシルビアちゃん。町人達も変なことに関わるまいとさっさとどこかに行ってしまった。

「さっきは助けってくれてありがとう。取りあえず俺と宿屋行かない？」

「い、行かない！ 私はこの先のヘイオスの沼地の大蛇退治に向かわなければならんだ……変態に構っている暇はない！」

「ああ〜！ あの大蛇ね！ 俺も仲間に入れてよ、大蛇退治！」

「……は？ 遊びではないのだぞ。素人が命を粗末にするな」

「えー。俺強いよ？ 超強いからさ。ほんとほんと」
「断る」

シルビアちゃんは俺に背を向けると一人でさっさと町を出て行ってしまった。

……確か、大蛇はLevel16のボスだったはずだ。Level18の彼女じゃ敵いつこない。

そこでだ。俺が救世主役をしよう。

大蛇VSシルビアちゃん シルビアちゃん苦戦 俺助ける サタン様かつこいい 共に宿屋へ ゴールイン

完璧じゃないか！

俺は紅いマントを勢いよく翻し、颯爽と彼女の後を追ってヘイオスの沼地へと向かった。

第2話 仲間

「……………何故付いてくる?」

バレた。尾行開始わずか三分で即効シルビアちゃんにバレた。彼女は眉間にしわを寄せて怪訝そうにこちらの様子を見ている。

「いやあ、俺って可愛い子がいるとついつい追いかけてきちゃうんだよなあ、本能的にさあ」

「……………」

シルビアちゃんは迷惑そうにしっしつとまるで動物かなんかを追い払うかのような仕草をした。何それ犬扱い? そういうの嫌いじゃないぜ?

「……………」

「……………」

「……………いい加減にしてくれないか?」

「え? なにが?」

「お前、大蛇がどれだけ危険かわかっているのか?」

「勿論! だって俺が呼んだんだし……………」

「呼んだ、だと?」

「あ、いや……………こつちの話し」

「お前……………何者なんだ?」

彼女は更に怪訝そうな顔になった。いけないいけない、口を滑らせないようになくちな。

「俺ねえ、魔法使いやってるんだわ。前まで凄腕の勇者に雇われて

ただけどさ、今は訳あって一人旅してる」

「魔法使い……だと？」

「あ、信じてない？　じゃあちよつとだけ魔法を見せてあげるよ」

俺が指をパチンと鳴らすと近くにあった森一帯が轟音と共にすべ
て吹き飛んだ。土埃が辺り一面に舞う。

シルビアちゃんは大きな瞳を更に大きくして、口をパクパクさせ
ていた。

「どう？　俺強いだろ？」

「バカかお前は！？　森が吹っ飛んでしまったじゃないか！！」

シルビアちゃんは思わず俺の後頭部をグーでガツンと殴り付けた。
なかなか暴力的なお嬢ちゃんだ……良い拳してやがる。

が、防御力的な問題で何もかもが気持ち良く感じてしまう。
ああ、もっとやってくれ。

「な！　お前さつきから痛みというものを感じているのか？」

「えっ？　あ、ああ、俺さあ、あ、アレ……アレなんだわ！　ドM
なんだわ！」

「や、やっぱり変態なのか……っ！……っ！」

シルビアちゃんは汚物を見るような目でこっちを見ている。

俺、そういう目嫌いじゃねえわ。

……あれ？　さつきは咄嗟にドMとか言っちゃまったが俺ってもし
かしてマジで……

「とにかく、私はお前と共に行動する気はない」

「そうなの？　俺はシルビアちゃんと行動する気満々なんだけどな

あゝ」

「……っ！ お前、何故私の名を知っている！？」

……俺は一体何度目の墓穴を掘っちまったんだろうか。

シルビアちゃんの俺を見る目は疑いから怯えへと変わっていた。

……うーむ、流石の魔王様でももう言い訳が出てこねえぞ。

「お前、何かを隠しているな？」

「おいおい、DMつてことまで暴露させておいてまだ俺のこと疑って……」

「まさかとは思いが、さっきの子供が言った通りお前本当は魔王なのではないだろうな？」

おい。

人間界で大人気のアニメ「名探偵コナソ」でもまだ主人公の招待バテてねえっつーのに、いくらなんでもこの展開俺の正体バレんの早過ぎだろっ？

じわりと額に冷や汗が滲みだした。

「……ふっ、まさかな。こんな変態が私達勇者の宿敵なはずがない」

彼女は自嘲しつつ、そう言った。

セーフだ。

自己解決してくれたぞ。俺、変態でよかった。

「じゃあな。もう会うこともなかるっ……付いてくるなよ？」

シルビアちゃんはギロリと俺を睨み付け、くるりと方向を変えて足早に林の中へと消えた。

つれないなあ。ルシファーみたいにつれないぜ。

俺は仕方なく彼女とは別行動でヘイオスの沼地へと向かった。

沼地ではヘドロの魔物や小さな虫やへびの魔物で溢れていた。そいつらの亡骸がそこかしこに転がっている。きっとシルビアちゃんが戦闘した痕跡だろう。剣の腕はLevel 8にしてはなかなかのようだ。

「確か、このでけえ木を潜った辺りにボス配置したはずだったな……」

その時、けたたましい轟音が沼地の淀んだ空気を激しく振動させた。きつと大蛇が移動するときの音だろう。それほどまでにヤツはでかいのだ。

「もう始まっているのか。シルビアちゃんは無事かな？」

大蛇“キングスネーク”は、シルビアを胴体でぐるぐる巻きにして、グイグイと締め上げている最中だった。チロチロとした舌先が今にも鼻先に触れそうになっている。

シルビアは抵抗しようと手に持った剣を振りかざすものの、抵抗も虚しく剣は手の平から地面へとするりと抜け落ちてしまった。予想通り苦戦中ってところか。

「……………ぐうっ！」

それでも抵抗しようと、足をばたつかせる。

もう少しアングルさえ良ければスカートの隙間からパンツが見え

そうだ……！

俺はごくりと生唾を飲み込んだ。そして、大蛇にこっそりとアイコンタクトを送る。大蛇はコクリと頷くと、シルビアちゃんの足に巻き付き、逆さ釣りにしてみせた。

「水玉！」

「ちょ、へ、変態！ 見てないで助けるっ」

「OK、OK。ただし、条件がある」

「な、なんだ？」

「俺をパーティーに加えてくれ」

「く……っ！ 仕方ない……加えてやるから手を貸してくれ！」

「よшきた！！ 超貸す！！！！ どっせえええい！！！！！！」

両手を振り上げると沼地一帯に閃光が走り、物凄い爆発音が響き渡った。辺り一面に煙りや埃が舞い上がり、たんぱく質の焼け焦げる独特の嫌な臭いが漂う。

「な……こ、今度は沼地ごと吹き飛んだぞ！？ お前、一体どんな魔法使ったんだ！？」

「言っただじゃん。俺強いよって」

俺は髪をかき上げ、ふふんと自慢げに笑って見せた。

そして、シルビアちゃんはそんな俺の尻を思いつき蹴り上げる。

「無駄なものまで破壊するなんて言っているんだ！！ 罪のない動物達まで巻き込んで……！！」

彼女は涙ぐみながら力説する。少々乱暴者のようだが、心は優しいようだ。これでこそ俺の嫁になる女である……！！

「すまない、君を守ろうと思ったら……つい、加減というものを忘れてしまった……」

「御託はいい。気色悪いやめろ」

シルビアちゃんは顔色ひとつ変えずにぴしゃりと言いつつ放った。

「次また無駄に破壊行為を行ったらお前をパーティから即はずすかな」

「ってことは、俺を仲間って認めてくれたんだね……！？では、さっそくよろしくねのキスを……」

ぐしゃああっ！

彼女は思いつ切り俺の顔を殴った。しかも、グーでだ。痛みは感じないものの変な音がした。

この子……多分剣より拳の方がいい線いってる。

「さっさと次のダンジョン目指すぞ、変態」

……こうして、かけだし勇者と変態魔王の奇妙な二人旅が始まったのであった。

第3話 双頭獣

「ねえねえ、まだ戦うの？」

俺は木陰に座り込み、頬杖を付きながらフィールドの魔物と必死に戦うシルビアを眺めていた。避けて通ればいいものを……シルビアちゃんは片っ端から雑魚敵に勝負を挑んでいる。

「しょうがないだろう、Level上げをしつかりやっておかないと強敵に敵わないから……お前もそんな所に座ってないで戦え！」
「はいはい」

俺はすつと立ち上がりその辺徘徊していたオオカミのような獣系の魔物に向かって拳を振り上げた。その瞬間魔物は踵を返し、全速力で逃げ出して行った。

「んだよ、なっさけないな」
「……お前、一体Levelいくつなんだ？」
「それはねえ……ヒ・ミ・ツ」

ウインク飛ばして語尾にハート付けるような話し方したのが気に障ったのか、彼女はこつちを思いつ切り睨んだ。……でも、言えねえよ。Level100とか言えねえよ。

その時、ヒュン！ と風を切る音が聞こえた。次の瞬間、キャツとシルビアの短い悲鳴が響き、頬に切り傷が一直線に出来た。

カマイタチか！？

辺りを見渡すと鳥系の魔物が上空からこつちの様子を窺っていた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……私としたことが油断してしまった」

シルビアちゃんは頬から出た血液を手の甲で拭い、剣を鞘から抜き、スツと腰を落として構える。

ウィンドブレード

“ 風 刃 ”

勢いよく剣先が上空に向かい弧を描き、風の刃が魔物に向かって飛んでいく。それは見事に命中し、魔物は地面へと落ちてきた。

その瞬間、彼女は淡い光の柱に包まれる。どうやらLevelが9に上がったようだ。

「おめでと〜！」

拍手しながらそう言うと、シルビアちゃんは照れているのか、目を伏せながら小さな声で「ありがとう」と呟いた。

「さて、そろそろ休憩といかないかな？ シルビアちゃんも疲れただろう」

「そうだな……最寄りのコルデスの街で少し休もう」

「……と、その前に」

俺はシルビアちゃんの頬に向かい手を伸ばす。白く柔らかい光が放たれ、頬にできた切り傷はスーッと消えてしまった。所謂“回復呪文”ってやつだ。

「可愛い顔に傷が残らないように、な」

「あ……す、すまない」

シルビアちゃんは再び目を伏せ、傷が消えたことを確認するかの

ように頬を手で擦っていた。

それから1時間ほど歩き、ようやくコルデスの街へと辿り着いた。

そこは、そこかしこに花が咲いていて、甘い香りで溢れていた。エイビスよりも栄えているようで、武器屋に防具屋、よろず屋にアケセサリーショップにカフェ……色々な店が並んでいる。民の数も多く、活気に満ちていた。

「噂には聞いていたが、綺麗な街だな」

シルビアちゃんはきよろきよろと辺りを見渡し、目を丸くしている。

「私、武器屋で剣を見てくる」

「え、あ……ちょっとシルビアちゃ……」

話しが終わらないうちにシルビアちゃんはさっさと人混みの中へと消えてしまった。迷子にならなければいいが……。

しかし、年頃の女子が真っ先に武器屋とは……でも、それがシルビアちゃんらしいのかな。

「さーて、俺はどうしようかな」

大きく伸びをして辺りを見渡す。近くに咲いていた大きな紫色の花から漂う芳香が俺の鼻孔を刺激する。花の香りはどうも苦手だ……。とりあえず、建物の中に避難しよう。

俺は近くにあった建物の中に入った。

ドアを開けると、むわっと酒の匂いがして、男達の妙にでかい笑

い声がこだまする。特に確認せずに入ってきてしまったが、ここはどうやら酒場だったようだ。俺はとりあえず部屋の隅に置かれている酒樽の上に腰を下ろした。傍のテーブルに座って飲んでいる声の大きな男2人組の会話がイヤがおうにも耳に入る。

「アイオーンが魔物に殺られちゃったそうぞ」

「なんだって？ あの凄腕の剣士がか？」

「ああ、何やら双頭獣がこの辺に出没しているらしいんだ」

「そりゃあ、恐ろしいことだな。いつ死んでもいいように今のうちに酒をたらふく飲んでおかねえと」

「がっはっはっは！ それくらいしか俺達には楽しみなんてないしなあ！」

双頭獣？

俺は耳を疑った。そんなもの召喚した覚えがなかったからだ。

“ 誰か俺以外に魔物を召喚できるヤツがいる ”

そんな考えがパツと脳裏を過る。変な胸騒ぎを感じて酒場を出ようとした瞬間、ちょうどドアから入ってきた男にトンとぶつかってしまった。

「おっと、すまな……」

「貴様！ どこ見て歩いてる!？」

「へっ?」

俺は身長2メートルはあろう大男に胸倉を掴まれてそのまま床に叩き付けられた。

え？ 一体何事？

痛みはなかったものの、あまりにも突然のことすぎてその場から

しばらく動けず、目を頻りに瞬きさせた。

「アイツ、確かアイオンとよくつるんでた……」
「アイオンが死んで苛々してんだろ。おー、怖い怖い。目え合わせるんじゃねえぞ」

さっきまで賑わっていた酒場が一瞬にして静まり返る。

大男はウオツカを注文し、空いていた席にどしりと腰を下ろした。筋肉質の体にポロポロの黒いマントを纏い、手入れされていないであろう長い黒髪をかきあげ、苛々とした表情で目を伏せている。

背中にバカでかい大剣を装備しているところから、きっと剣士だろう。

その時、大男が「何を見ている」と言わんばかりにこっちを睨んだ。

俺は面倒な事に巻き込まれるのが嫌だったので、速攻で目を逸らし、そそくさと酒場を後にした。

第4話 雨

「さて、そろそろシルビアちゃんと合流するか……」

さつきまでの晴天が嘘だったかのように空はどんよりとしていて空気が重苦しい。そろそろ陽が落ちる時間帯ということもあり、辺りは闇に飲み込まれつつあった。

その時、ポツッと頬に滴が落ちる。とうとう雨が降り出してしまった。

俺は足早に武器屋へと向かった。

店内へと続くドアを開けると、シルビアちゃんが熱心に剣を見比べている姿が視界に入った。

「それ、欲しいの？」

「わわわわわ……!?!?」

急に声を掛けられた彼女は驚いてしまい、手に持っていた剣を落としそうになる。間一髪のところでなんとか剣を受け止めて、ホッとした表情を見せるや否や、ガツリと俺の後頭部を殴った。

「脅かすな……バカ!!!」

ざわざわとしていた店内だったが、いきなりの怒声に驚き静まり返り、客が一斉に彼女に注目した。

シルビアちゃんは恥ずかしそうに俯くと、小声でこう言った。

「何の用だ？」

「その剣欲しいのかなーって……買ってあげようか？」

「な……そうやって優しくしておいて後々変態な事を要求するんじゃないだろうな？」

「そんなのあたりまえじゃないか」

ゴツと鼻筋を殴られた。普通の人間だったら鼻血吹いて倒れてもおかしくない威力だ。

「うそうそ……いや、そうしたいのはほんとなんだけどさ。買ってあげるよ」

「い、いいのか？」

シルビアちゃんの瞳が期待の眼差しで大きく見開かれる。まだlevel10にも満たないかけだし勇者じゃ、そんなに金も持っていないのだろう。エイビスで剣を物色していた時も「欲しい剣はあるが手が届きそうもない」という表情をしていたのを俺は見逃しはしなかった。

剣の会計を済まし、シルビアちゃんに手渡す。いつものムスツとした表情からは想像も出来ないような笑みが零れた。

「ありがとう！ ……そういえば、私はまだお前の名前を知らない。何と言うのだ？」

「サタン、だ」

「『サタン』か……魔王みたいな名前だな」

「そうだね。魔王みたいな名前だね」

一瞬冷や汗が額に滲んだが、さらりと流してみた。この展開にも概ね慣れた。

「改めてありがとう、サタン」

嬉しそうなシルビアちゃん。初めて見る少女のような彼女を見て、俺は満足そうに微笑んだ。

店を出ると外は大荒れだった。雨が降りしきり、雷の轟音が空気を揺るがす。

二人は宿屋へと泊まることになった。

「ようこそいらっしゃいました。お二人様ですね。どうぞ、こちらへ……」

フロントのフードを被った物腰が柔らかそうな白髪の老婆に部屋まで案内される。廊下は少しうす暗く、所々に置かれたランプの光が辺りをぼんやりと照らしている。

「お部屋はこちらになります。どうぞ、ごゆっくり」

女性はそういうと、何故か意味あり気に微笑み、フロントへと戻って行った。

案内された部屋はごんまりとしていて、ベッドはひとつしかなかった。小さなクローゼットに小さなテーブル、ダークブラウンの小さなソファ。ベッドの向かいにある棚の上には古そうなテレビのモニターが置かれている。

テーブルの上にあるランタンの炎がゆらゆらと部屋の中をオレンジ色に染めていた。

「……………」

「……………シルビアちゃん、そんなに警戒しなくても」

彼女はクローゼットの脇にちょこんと腰を下ろし、俺と一定の距離を保とうとしていた。

「雨で濡れただろ？ お風呂に入っておいでよ」

「……………どうせ覗くんだろ？」

「じゃあ、一緒に入る？」

「入らない！」

「冗談だよ冗談。風邪引いちゃうから入っておいでよ」

「……………絶対絶対、覗かないと約束できるか？」

眉をひそめ、困ったかのような表情でシルビアちゃんは俺を見つめた。思わず意地悪をしたくなったが、グツと堪えて「約束する」と頷いた。

シルビアちゃんは隣接している脱衣所のドアを開けたところで、再度俺の様子を窺い「覗くなよ！」と言い残し、少々強めにドアを閉めた。

耳を澄ますとガサゴソと彼女が脱衣する音が聞こえる。思わず口元がニヤけたが、悪戯心を鎮めるためにテレビのモニターのスイッチを入れた。

画面に映し出されたのは見たこともない魔物の映像。ブラウン管の中で二つの首を持った狼のような魔物が森で暴れていた。少し離れたところでリポーターが何かを話している。

“双頭獣”

この世界の魔物は全て俺が召喚しているはずであった。なのに、見たこともない魔物が現れている。これは、一体どういこと

なのか……。
ゾワゾワと胸騒ぎを感じる。俺は思わずモニターのスイッチを切った。

静まり返った部屋に雨音が響き渡る。

カーテンをそつと開き、窓の外を眺めた。豪雨のせいで辺りには霧が立ち込めていた。

「雨も久々だな……魔界では気象なんてものないからな」

その時、フツとまだ人間だった頃の記憶がフラッシュバックしたような気がした。俺は手の平を額に当て、苦痛に歪んだ表情を浮かべた。

(……久々の人間界にちょっと疲れたか?)

俺は自嘲するような薄笑いを浮かべ、ソファアの上で横になった。

第5話 襲撃

のしつ。

俺は身体の上に何か重みを感じて「うう……」と唸りながら目を覚ました。

辺りはまだ闇に包まれていることから夜中だろう。暗すぎて自分の上に乗っているのが何者なのかもよくわからない。

暫くして暗闇に慣れてきた瞳は、とんでもない光景を目にする。

「シ、シシ……シルビアちゃん!？」

俺の胸の上にちよこんとシルビアちゃんに乗っていた。口をポカッと開けてぐつぐつと眠っているようだ……。普段着ている上着は身に付けておらず、黒のドレスからは今にも胸がはだけそうになっている。

これは夢か？

自分の顔を思いつ切り殴ってみる。痛い。流石俺の攻撃力だ。久々にダメージを受けた。

って、感心してる場合じゃねえ……!

ごくりと喉が波打った。

そろりそろりとシルビアちゃんの胸へと手を伸ばす。

「んう……」

彼女が小さく呻き、びっくりして手を離す。

「うーん……」

がばっ。

突如、寝返りをうつたかと思いきや、シルビアちゃんに頭を抱きかかえられた。胸に顔が圧迫される。ソレ特有の柔らかい感触は、俺の理性の鎖を外すのは容易かった。

俺はシルビアちゃんを抱きしめ、自分の唇と彼女の唇を重ね合わせようとした。

「……ん？」

ぱちりとそこでシルビアちゃんの瞳は開いた。

一頻り間を置いて、彼女はニコツと微笑み俺の頬を引つ叩いた。

「何しようとしていた変態!？」

「え、や、だって、誘ってきたのはシルビアちゃんじゃ……!!」

シルビアちゃんが再び手を振り上げる。

「何を言っている？ そんな訳ないだろう!」

彼女の腕がしなり、俺の頬に衝撃が走る。

一つわかったことは、彼女の寝相はとんでもないって事だけだった。

「……ん？」

「……どうした、サタン？」

さっきまでふざけていた俺がいきなり顔をしかめたことに気付き、思わずシルビアちゃんが身構える。

「足音だ……それに、殺気を感じる」
「何だと？」

耳を澄まし、神経をとがらせる。

「……魔族、か？」

それは、確かに同族が発する気だった。俺は眉をひそめる。

魔族は魔王……つまりは、俺の命令無しには動かないはずだ。しかも、殺気立ちながら俺を襲おうとするなんて言語道断だった。

やっぱり、何かがおかしい。

「サ、サタン……くるぞ！」

けたたましい音とともに派手にドアが壊された。

中になだれ込んできたのは、なんとフロントにいた白髪の老婆だった。手には大きな鎌のようなものが握られている。

「な、この人……!?!？」

魔族の正体を見るや否や、彼女は怯んでしまった。すかさず魔族は鎌を振るう。

「させるか!？」

直撃寸前というところで、鎌を素手で受け止めた。

「見た目に反して、ずいぶんと俊敏だなあ、婆さんよ!？」

鎌を掴んだまま、そのまま魔族ごと薙ぎ払う。そして、バランスを崩した隙を狙って傍にあった椅子を思いっ切り投げ付けた。

「ぐあああつ!!」

「……俺を誰だと思ってやがる」

痛みで悶え苦しむ魔族を俺は右足で踏み付け、睨みつけた。

「誰の命令だ？ 誰が魔界で動いてやがる？」

その瞬間、魔族の身体から赤い光が放たれ、耳をつんざくような爆発音が響く。

俺は咄嗟にシルビアちゃんを抱きかかえて地に伏せた。魔族はどうやら魔法も使えるようだ。

「くっ……シルビアちゃん、大丈夫か？」

「あ、ああ……なんとか」

「あいつ……ちよつとおいたが過ぎるな」

パラパラと落ちてくる天井の破片を払いのけ、俺は右手を掲げた。

“ 地^{ヘルフレア} 獄 の 業 火 ”

「ぐああああああつ!!!!」

突如、魔族の足元から野太い火柱が発生した。炎を浴びせられて魔族は苦悶の声を発する。

やがて、魔族の姿はゆっくりと滅び崩れ、灰のようになってさーっと消えていった。

「勝った……のか？」

シルビアちゃんがよろよろと腰を下ろす。魔族との戦闘は初めてだったのだろう。額を流れる汗がその恐怖を物語っている。

「もう大丈夫だよ。いきなりの戦闘で疲れただろう？ 俺がまた変なのこないように見張ってるから、少し休みなよ……って」

シルビアちゃんは既に床の上で寝息を立てていた。相当疲れていたのか、元から寝付きが相当いいのか……。

俺は彼女をそっとベッドの上まで運び、毛布を掛けた。

外からガヤガヤと声が聞こえる。これだけ大騒ぎしていたんだ……きっと民達も魔族騒動に気が付いたのだろう。

面倒なことにならないように、早朝にはこの街を出るか。双頭獣についても真相を確かめないといけないしな……。

俺はソファーに深く腰掛け、ぼんやりとランタンの炎を眺めながら朝日が昇るのを待った。

第6話 無骨な剣士

早朝、俺達はコルデスの街を後にした。そして、双頭獣が暴れているラウルの森を目指す。

隣ではまだ眠たそうなシルビアちゃんがとぼとぼと元気なく歩いていた。今なら尻を触っても気付かれないんじゃないかってくらい脱力している。どうやら、朝に弱いようだ。

「大丈夫？ シルビアちゃん」

「……ああ……大丈夫だ……多分……」

その時、シルビアちゃんがつま先付近にあった大きな岩につまづき、ズザーッと盛大に転んだ。全然大丈夫じゃないこの子……！俺はすぐさま彼女を助け起こした。

「シ、シルビアちゃん？」

驚いたことに、彼女はそのまま寝ていた。おいおい、冗談だろ。夜中の寝相といい、寝起きの悪さといい……つまりこれは、悪戯し放題ってことだな！

「取り込み中、すまない」

都合の良いように解釈し、まさにシルビアちゃんに悪戯しようとしたところで誰かに声を掛けられた。

……んだよ、これからって時に。不機嫌そうな眼差しで声の主に視線を向ける。

「あんたは……！」

声の主は、昨日酒場で俺を叩きつけた長髪マントな大男だった。

「昨日はすまなかった」

大男は深々と俺に向かって頭を下げた。昨日の無骨な態度とのあまりの差にどうすればいいかわからず、俺は言葉が出なかった。

「街で魔族を倒したと聞いた。貴殿はなかなか腕が立つようだな」「ま、まあな。魔法の腕にはちよいと自信はあるが……」

ガシツ。

「……へっ？」

突然大男に両手を握られる。ちょ、ちょっと待て。俺にはそんな趣味は……！

「なんと！ 魔法を使えると言うのか！ 貴殿にどうしても頼みたいことがあるのだが」

「だああっ！ わかった……わかったからその手を離せえいっ！！」

俺は大男の手を振りほどき、数歩下がって距離を置いた。

「双頭獣を倒すのを助太刀して欲しいのだ」

「双頭獣だって？ それなら好都合だ」

俺が頷くを見て、大男は歡喜の表情を浮かべ両手を広げる。おい、抱き付かれるのは勘弁だぞ……俺は更に数歩下がる。

「んう……やかましいぞ、サタン……ん？」

その時、シルビアが目を覚ました。

彼女は目の前にいる大男の存在に気が付くと、身体を硬直させて瞳を見開いた。

「だ、誰だ……この大きいのは？」

「失礼した。申し遅れてしまったが、わたしはカイク。カイク〃オーランドだ。昔は傭兵をしていたが、今はただの剣士をしている」

「俺は一流魔法使いのサタンだ。で、こっちの赤髪の美しい女性が勇者のシルビアちゃん」

シルビアちゃんは状況を上手く飲み込めないのか、キョロキョロと俺とカイクの顔を交互に見ている。

「サタン殿、シルビア殿。短い間だが、世話になる」

カイクはまた深々と頭を下げた。シルビアちゃんはよくわかっていないような表情を浮かべていたが、それに合わせてぺこりとお辞儀をする。

「双頭獣は強敵だ。わたしの戦友も……アイツに殺されてしまった」

カイクの瞳に一瞬悲しみの色が滲んだが、すぐにそれは掻き消され、力強くこう言った。

「このままではいずれ、街にまであいつは足を延ばすことだろう。その前に何が何でも討伐しなくてはならない」

彼は何かを決意したかのように前を向き、まっすぐと森へと向か

って歩きだした。俺とシルビアちゃんもその大きな背中を追い、森へと向かった。

俺達がラウルの森に着いた頃には、既に陽が落ち掛けていて、空は橙と青紫のグラデーションに染められていた。

「夜の森は危険だ。二人共気を付けるんだぞ」

カイムの呼び掛けに俺は「ああ」と頷き、シルビアちゃんはいつでも剣が抜けるように右手で剣の柄を握った。

森特有の湿気を含んだ重苦しい空気が肌に纏わり付く。時折遠くで「オオオオオオ……」と狼の遠吠えのようなものが風に乗って聞こえ、その度にびくびくとシルビアちゃんが姿勢を低くする。口数も少ないようだし、随分とビビっているようだ。

「大丈夫だよ。いざとなったら俺が守ってあげるから、さ」

そう言っつて、どさくさに紛れて彼女の尻へと手を伸ばす。

「どこを触っている!?!」

「じきっ!!--」

シルビアちゃんの鉄拳が素早く繰り出され、鈍い音が俺の鳩尾から響く。

……うん。やっぱり彼女はこうでないと。

「ほう。シルビア殿はなかなかいい拳をしているな」

「そうか？ サタンのお陰でだいぶ鍛えられた」

「なるほど。サタン殿がシルビア殿を鍛え上げたのですな……！」

尊敬の眼差しで見つめられるのは悪い気はしないが……違つぞ、カイク。

彼女は俺をサンドバッグに使って自ら鍛え上げたんだ……。

……あれから一体どのくらいの時間歩いたのだろうか。

俺とカイクはまだしも、シルビアちゃんの歩くペースが大分落ちてきていた。疲れからか、地を何匹もの蛇が這っているかのように張り巡らされた木の根に彼女は、幾度となく足を取られてはつまずいて転んでいた。

「今日はもう休みましょう」

それを見兼ねて、声を掛けたのはカイクだった。

「……す、すまない……足を引っ張ってしまって」

息を切らしながらシルビアちゃんが申し訳なさそうに俯いた。しよんぼりとしている彼女にすかさず優しい言葉を掛けようとしたが

……

「そんなことはありません。わたしもそろそろ休憩しようと思っていたところですよ。体力を温存しておかないといざ双頭獣と戦闘になっても不利になりますからね」

俺とシルビアちゃんの間割り込んできたカイムの無駄にでかい背中のお陰でそれは不可能となった。

出番を奪われた俺は思わずギリっと下唇を噛みしめる。

そんなことは露知らず、カイムは濃紺の腰下げ袋からマッチを取り出した。

そして、段取りよく枯れ枝や枯れ葉を集め火を付ける。無骨な見た目に反して用意周到な男らしい。

「わたしが見張っておこう。サタン殿とシルビア殿は体を休めてください」

「ああ、すまないな」

「……スー」

カイムが見張りを申し出てくれたので俺はそれに甘えることにした。昨日から殆ど寝ていなかったので、流石に疲労感がある。

……言うまでもないが、シルビアちゃんは既に横になり眠っていた。

煌々と燃え上がる焚火の紅蓮色をぼんやりと瞳に映しつつ考え事をしていくうちに、俺の意識は深い闇の中へと堕ちて行った。

第7話 死闘

目が覚める。

昨日の一件以来、妙に殺気には鋭くなってしまったようだ。体を起こすと、しかめっ面したカイルと目が合った。

「今起こそうとしたところです。流石ですな、寝ていても殺気を感じ取れるとは」

「おっと、感心している場合じゃないみたいだぜ？」

暗い闇の中で獣の低い唸り声が聞こえる。

……いや、ただの獣の声じゃないな。

地を這うような太い声にずっしりとした鉛のような鈍い声……二つの声が混じり合っている。

それが意味するのは、獣が二頭いるのか、あるいは……

「……双頭獣、か？」

俺はシルビアちゃんの肩を揺すり起こす。

流石の彼女も雰囲気を感じたのか、咄嗟に飛び起きて剣の柄に手を伸ばした。

殺気はすぐ背後まで近付いている。しかし、辺りは暗闇に包まれていて正確な居場所までは特定できない。

カイルも自分の身の丈程もある大剣を鞘から静かに引き抜き、息を殺して相手の出方を窺っているようだ。

その時、シルビアちゃんの背後で小枝が折れる微かな音がしたのを俺は聞き逃しはしなかった。

「シルビアちゃん！ 伏せる！！」

闇から飛び出した獣は素早くシルビア目掛けて鋭い爪をきらめかせたが、寸前のところでカイクの大剣が攻撃を受け止める。流石は元傭兵と言うべきか、その動きには隙というものがなかった。

獣は攻撃を回避されるや否や、身を翻して再度闇の中へと消えて息を潜めた。

面倒そうな相手だな……力に俊敏性に知恵までありやがるとは。

「きまずぞ！」

今度は俺の横を獣の攻撃がかすめた。なんとか避けはしたものの、風圧の強さがその威力を物語る。

……どこのどいつだか知らないが、なかなかの難敵を召喚してくれたみたいだな。

獣は方向転換し、俺の目の前で向き合う形になった。

その姿は一見すると狼のようだったが、身の丈は人間の二倍つてところだろうか。尻尾と頭はそれぞれ二本あり、異様な雰囲気を持っている。整った銀色の毛並みは月光を受けて輝いていた。

「お前が双頭獣だな？ よかろう、遊んでやる！」

俺は右手を掲げる。その右手目掛けて双頭獣はまるで子犬がじゃれ付くかのように飛びかかってきた。

「っ！！」

ギリギリでそれをかわす。

おいおい……コイツわかっててそこを狙ったのか？ 右手封じられちゃったら元も子もないっての！

「危ないっ！ サタン！！」

シルビアちゃんの甲高い声が森にこだまする。

双頭獣は身を翻して無理やり方向を変え、再度俺に向かって飛びかかってきた。

間に合わない！

俺は反射的に瞳を強く閉じた。

……それとほぼ同時だっただろうか。

金属音が響き渡り、俺に突き刺さる“はずだった”鋭い牙はいつまで経っても身体を貫くことはなかった。

「油断大敵ですぞ……サタン殿」

さっきのシルビアちゃんと同じように俺はカイムの大剣に守られていた。

畜生……俺としたことが情けない。

「わたしがアイツの気を引きます！ サタン殿は後方から魔法を放ってください！」

そう言い、カイムは豪快に大剣を振り回し双頭獣を挑発する。

攻撃の対象が俺から逸れた瞬間、すかさず魔法の詠唱に入り右手を高く掲げる。

フレイムブリット
“ 火 炎 弾 ”

幾つかの火球が俺の周りに浮かび上がる。それらは双頭獣目掛けで勢いよく炸裂し、地をも揺るがす爆発音を発した。物凄い土埃が立ち込め、視界を妨げる。

「やったか……!?!」

徐々に晴れていく視界の中心に“ヤツ”の姿はなかった。

「……な、んだと?」

再度精神を研ぎ澄まそうとした瞬間、顔の横をヒュンという風を切る音が聞こえた。

一呼吸置いて、風圧と共に頬が熱を帯びた。咄嗟に手の平を頬に当てると、ぬるっという感触……俺の頬は血で染まっていた。

「サタン! 大丈夫か!?!」

「サタン殿!!」

「……来るな!」

俺は駆け寄ろうとしたシルビアちゃんとカイムを制止した。一カ所に集まったりなんかしたらそれこそヤツの思いつぼだ。

「また隠れちまう前にアイツの動きを封じない限りは勝機が見えねえな」

「……よし。ここはわたしが!」

カイムが大剣を構えて双頭獣に狙いを付ける。

“ 龍牙双波斬 ”

カイムは前方に力強く踏み込み、大きく斬り上げた直後すかさず斬り下ろし、鋭い衝撃波を放った。

それは双頭獣の足元へと命中し、ゴオっと土の砕ける音が響いた。

しかし、ヤツは高く跳躍して、それをいとも簡単に回避する。その光景を見届けたカイムの口元は、何故か僅かながらに笑みがこぼれていた。

“ 紅蓮炎纏刃 ”

目にも止まらぬ程機敏にカイムは跳躍し、炎を纏った大剣を双頭獣に向かつて振り下ろす。

最初の攻撃はフェイントだったってことか……！

オオオオオオオオ ！

大剣は見事に双頭獣の脇腹を捉えた。

ヤツは苦しそうな呻き声を上げ、体毛に発火した炎を掻き消すためにもんどりうって倒れこみ、地面の上で悶え苦しんでいた。

「ずいぶん熱そうだなあ？ こいつで冷やしてやるうか？」

俺は素早く詠唱し、左手を振り上げた。

“ 氷結魔槍 ”

空をも突き抜くような巨大な氷の塊が中に浮かぶ。その切っ先が狙いを定めた瞬間、それは物凄い勢いでヤツの腹に突き立った。

氷は腹を貫通して地面へと突き刺さっている。所謂串刺し状態だ。

ヤツは弱りきっていて「クウウン」とか細い声を上げていたが、まだ手足をじたばたとさせて苦痛から逃れようとしていた。

「これでも動いていられるとは……なかなかやるねえ、仔犬ちゃんじゃあ、とどめはシルビアちゃん宜しく」

「ええっ!?!」

俺とカイムの背後に立ちつくしていたシルビアちゃんに突如話を振る。彼女は驚いて握っていた剣を落としそうになった。うん、予想通りのリアクションだね。

「わ……わかった……!　いくぞ!!!」

シルビアちゃんはゆっくりと腰を落として構えの姿勢をとる。

ライトニングブレイド
“ 雷 撃 刃 ”

青白い雷を纏った剣を振り下ろし、剣先から拡散した雷撃が双頭獣の眉間へと命中する。

ヤツの眉間はパツクリと裂けていて、黒煙がそこから立ち上っていた。流石のアイツもこれは致命傷になったはずだ。

オオオオオオオ
.....

まるで遠吠えのような最期の呻き声をあげて、ヤツはその場で息絶えた。

第8話 旅立ち

なんとか双頭獣を撃破し、俺達は野営していた場所へと戻り、夜が明けるのを待っていた。

……しかし、あの犬っころ。この俺の端正すぎる顔に傷をつけるとは、心底腹立たしい。

つーか、俺の鉄壁の防御が崩されたことが心底悔しい。

「サタンもちゃんと血が流れるんだな」

眉間にしわを寄せて目を伏せていた俺に、シルビアちゃんが悪戯な笑みをこぼす。

おいおい、俺は魔王かなんかかつーの！！ …… って、俺は魔王なのか。血も涙もない魔王だ。そう思われてもおおかしくはない。

「強いから、何があっても無敵なのだと思っていた」

そう言って、俺の頬に出来た傷にアルコールを染み込ませた綿でぼんぼんと消毒し始める。本当は回復呪文を使えばこの程度の傷なら一発だったが、シチュエーション的になかなか美味しいし、黙っておこう。

ちなみに、簡易的な物ではあったが、救急セットはカイクが持ち合わせていた。つくづく用意周到な男だ。

シルビアは、消毒が終わると手際よくガーゼをテープで止めていった。

「出来たぞ」

バチンと傷口を手の平で叩かれた。女の子らしいところもあるんだなあって感心したところだというのにこの仕打ちである。……でも、そんなガサツな一面も大好きだ！

「ありがとうシルビアちゃん。お礼に熱い口付けを……」
「いらん」

シルビアは俺にくるりと背を向けて座り込み、剣の手入れを始めた。きつと、照れてるんだろうなあ。うん。

「今日は助けられた。本当に感謝している」

満面の笑みを浮かべてカイクが俺の傍へと近寄ってくる。昼間の一件がフラッシュバックして俺は数歩下がった。

「サタン殿は今後どうされるのです？」

「今後、か。そうだな……」

結局双頭獣は倒したものの、何も掴むことは出来なかった。誰がああ魔物を召喚したのが気になる。魔界に戻って確かめる方法もあるが……何故だろう。真実を知ろうとするほど胸騒ぎを感じる。それに、俺はシルビアちゃんから離れてはいけないような気がしたんだ。

「勇者様任せ……かな」

そう言って剣の手入れに没頭している彼女の背中に目をやった。カイクは「なるほど」と頷く。

「カイムはどうするんだ？ さっきの戦闘で相当腕が立つと見たが」
「ははは、サタン殿、またまたご謙遜を……」

そう言って、彼は苦笑する。そして、遠くを見つめながらこう続けた。

「わたしはコルデスの街で雇われている剣士なので、今後あの街を魔物から守っていきますよ。アイオンの分まで、わたしが頑張らなくてはな」

「アイオンって奴と一緒にコルデスで雇われていたのか？」

「ええ。彼は昔からの戦友であり親友でした。話すと長くなるので多くは語りませんが……彼は双頭獣との戦闘でわたしを庇って亡くなっただんです」

「そうだったのか……変なことを聞いたな。すまない」

「いいえ、謝ることはありません。いつまでも悲しんではいられませんがからね……アイオンに怒られてしまっ」

カイムは闇を照らしている焚火の赤色に対し、眩しそうに目を細めた。

……いや、そういう理由で目を細めたんじゃない。よく見ると彼の目からは涙が一筋流れ出ていた。

「さて、そろそろ休みましょうか」

炎から目を逸らさないまま彼はそう言った。

「ああ、そうだな。シルビアちゃんもそろそろ休もうぜ」

「……スー」

……………。

何となくそんな気はしていた。

翌朝。

朝日が木々の隙間からいく筋も射し込んでいる。

その白いヴェールの眩しさに俺は思わず目を伏せた。

夜の漆黒に染められた森からは想像も出来ないような淡い緑色が一面に広がっている。

そんな木々達に見送られる中、俺達とカイムはそれぞれの旅路を進めた。

カイムとの別れ際「これは、お礼です。受け取ってください」と、彼から金色の飾りと紅い宝石が施された首飾りを手渡された。飾りは拳くらいの大きさをしている。施されている血のような色をした小さな宝石の名前が気になったが……そんなことよりもさっきまでカイムが装着していたからか首飾りが生温かったのと、受け渡す時に掴まれた両手をなかなか離してくれなかったことが気になって、どうでもよくなってしまうた。

カイムは俺達とは逆方向の道へと進み、コルデスの街へと戻って行った。何度も何度も振り返っては笑顔で大きく手を振っている。苦笑しつつそれに応え、俺達も進むべき道を歩みだした。

俺達はとりあえず「火纏樹」ほていじゆが生い茂っているとされる集落へと向かってみることにした。

……とは言っても、勇者様は俺の背中ですやすやと寝息を立てているので決めたのは俺の独断なんだけどな。

「……うー……サタン……」

シルビアちゃんが寝言で俺の名を呼んでいる。一体どんな夢見ているんだろうか。あんな夢か？ ……それとも、こんな夢なのか！？
やーん、シルビアちゃんったらエッチ！

「……お前のあばら骨……案外脆いんだな……楽勝だ……」

俺は寝言の後半は敢えて聞かなかったことにし、背中に当たっている柔らかい感触を楽しみつつ足を進めた。

外伝 二人の傭兵（1）

わたしの故郷、フローズンビレッジ。

常に大地には深々と雪が降り積もり、白一色に染められている。

「今日は一段と冷えるな」

手と鼻の頭を真っ赤に染めつつ、アイオーンは手の平に白い息を吹き掛ける。

彼の肩に付くくらい銀髪と透き通るような白い肌は、雪景色に今にも溶け込んでしまいそうだった。

それとは対照的な漆黒の髪を腰の辺りで揺らしつつ、わたしは歩き慣れた並木道を歩く。

その時、急な突風に粉雪が宙を舞い、寒さを防ぐために羽織っていた毛皮のマントがバサバサとなびいた。

「くうーっ、寒い！ 早くポルタさんの手料理食いてえー！」

身震いしながらアイオーンが叫ぶ。

週に一度、わたしの家に彼を招待し、夕飯を共に食べるのが習慣になっている。

今日はその日なのだ。

「ポルタ、戻ったぞ」

ドアを開けると、ミルクのようなチーズのような……なんとも言えない濃厚な香りが鼻腔を刺激する。今日はシチューだろうか？

「……………ポルタ？ どこに行ったのだ？」
「どうしたんだい？」

玄関で身体に付いた雪を払いながら、首だけこちらに向けてアイオーンが尋ねる。

「ポルタが見当たらない」
「なんだって!？」

わたしの妻　ポルタは、普段わたしが仕事から帰ると真っ先に玄関まで来て「お帰りなさい」と挨拶をしてくれていた。しかし、おかしなことに今日は姿さえ見えない。

キッチンでは鍋が火に掛けられて、コトコトと音を立てながら湯気を放っている。外出しているわけではなさそうだ。

「ポルタ…………？」

部屋を見渡すと、洗面所へと続くドアが開けっ放しになっているのに気が付く。
洗面所を覗くと、ポルタが洗面台に顔を突っ伏してぐったりとしていた。

「ポルタ！　大丈夫か!？」

わたしは驚いて妻に駆け寄り、背中を擦った。

「あなた……お帰りなさい。玄関まで行けなくてごめんなさいね」
「一体どうしたのだ？ 顔色が悪いではないか……」

ポルタはずいぶんと青白い顔をしていた。対照的な臙脂色えんじいろのセーターを着ていたからか、余計にその顔色は目立って見える。ダークブラウンの長髪も普段より幾分か艶がないように感じた。
時折「うう……」と苦しそうに呻き、口元を手で押さええている。どうやら吐き気があるようだ。

「カイク、ポルタさんは見つかったのか？」

アイオーンが洗面所の入り口からわたし達の様子を伺う。ポルタの顔色を見て、彼もまた目を丸くした。

「具合が悪いのかい！？ 大変だ……すぐ医者を呼ぼう！」
「だ、大丈夫なのよ……アイオーン」

妻は走り出そうとしたアイオーンの腕を掴み制止する。

「この体調不良は、とても幸せなことなの」

妻の不可解な一言にわたしとアイオーンは啞然とする。

「幸せ……？ それは一体どういう事なんだ？」

わたしのあつけにとられた様子を見た妻は、恥ずかしそうに目を伏せて、頬を薄紅色に染めつつ小さな声でこつ言った。

「出来たのよ……赤ちゃん」

な、な、な、なんと！

わたしは感激のあまり声が出ないまま、涙を浮かべて妻の両手ががっしりと掴み、ぶんぶんと上下に振った。

妻は「痛い、痛いわ、あなた」と言いつつも幸せそうに微笑み、アイオーンはそんなわたし達の様子を見て「やるなあ、カイクム」とニヤニヤと笑っていた。

幸せだった。今のわたしには、暖炉のパチパチという火のはぜる音でさえも我々を祝福してくれているかのように聞こえる。

今日食べた妻特製の仔ウサギのシチューは一段と美味しく感じた。この味をきつとわたしは忘れることはないのだろう。

その日から、数ヶ月の月日が流れた。

妻のお腹は大きく膨らみ、宿った命が順調に育っているということを主張する。

「では、そろそろ行ってくる」

「あなた……」

暖炉の前で椅子に座り、お腹を撫でていた妻が立ち上がり、不安

な声を上げる。

「大丈夫だ。必ず戻ってくる」

「……信じているわ……でも……」

仕事へ向かおうとすると、毎日妻が涙を流すようになった。今日もわたしの腕の中で、小さく肩を震わせている。

わたしの仕事は所謂“傭兵”だった。

人を殺めることだって勿論ある。裏を返せば、いつ命を奪われてもおかしくはなかった。戦争とはそういうものだ。

妻は暫く嗚咽を漏らしていたが、意を決したかのようにわたしの腕の中から抜け出た。

瞼が赤く腫れ上がっている。唇を噛み締めたのか、口角にはうっすらと血液が見え隠れしていた。

ここまで妻が泣くことがあっただろうか……。

もしかしたら、彼女は気付いていたのかもしれない。

外伝 二人の傭兵(2)

「……なあ、カイク」

戦地へと向かう馬車の中で、アイオーンは声を潜めつつわたしに話し掛ける。

彼もまた、わたしと同じ傭兵だった。

「今日の戦は敵兵に魔法部隊が多いそうだ」

「話は聞いている」

「ならば……！」

アイオーンが声を荒げる。わたしは彼に手の平を向け、首を横に振った。

彼が続けようとした言葉は手に取るようにわかっていた。

「わたしはこの仕事に誇りを持っている」

「あのかなあ……お前は家族と戦、どっちが大切だっただんだ!？」

「どちらもだ。だから戦で生き残り、必ず家族の元へと戻る。それだけだ」

「……」

一拍置いて、彼は馬車の床を拳でドンと殴りつけた。

数週間後、我々を乗せた馬車は戦場へと到着した。

戦場では雷鳴が轟き、腹の底まで響くかのような爆発音が響き渡っていた。

爆発音が響く度に地面が小刻みに震動する。それは、炎系の上位魔法“エクスプロージョン大爆発”の威力を誇示していた。

我々傭兵の戦闘配置は最前線。つまりは、敵陣の前線で兵を魔法で一掃する役割を果たしている魔法部隊との戦闘を強いられることになる。

「上位魔法……噂には聞いていたが、なんて強さなんだ……！」

「これじゃ迂闊に近付けない……こんな奴らと戦えって言うのか！？」

「お……俺は降りるぞ……」

ひとり、またひとりと傭兵が踵を返して逃げ出していく。

そんな奴らを横目で見ながら、わたしは背中の鞘から大剣を引き抜いた。

「カイク……」

わたしの様子を見て、アイオンが声を掛ける。

「お前も降りろ」

「何を言うのだ、アイオン。戦場で傭兵が逃げ出すなんて……それがどれ程愚かな行為か、お前もよくわかっているだろう」

「それはわかっている。だが、この戦……俺達傭兵はどう見ても「ここは戦場だ。無駄話などしていると命を落とすぞ！」

わたしは彼の言葉が言い終わる手前、最前線へと向かい力強く駆

け出していた。

最前線では所々炎が燃え広がっていた。

火の粉が飛び散り、黒煙が視界を遮る。

足元には何人も仲間の傭兵が黒こげの遺体となってゴロゴロと転がっていた。

その時、ゴオッと目の前で大きな火柱が立ち上る。

わたしはすかさず大剣を自身の前で構え、防御の姿勢を取る。髪が少し焦げたのか、ちりちりと嫌な臭いを放った。

安心したのも束の間、今度は耳をつんざくようなけたたましい雷鳴が響き“雷撃”サンダーボルトが左腕に炸裂した。鋭い痛みと痺れに思わず「ぐう……」と呻く。

「カイム！」

アイオーンが駆け寄り、わたしの腕を掴む。そして傷口に手をかざして“治療”ヒールを唱える。

彼は所謂「魔法剣士」であり、殆どの下位魔法をマスターしていた。

「あの程度の魔法避けられないなんて、お前らしくもない……もし迷いがあるのなら」

「迷ってなどいない!！」

わたしはがむしゃらに大剣を振り回しながら炎の壁や雷の雨を掻い潜り、魔法部隊に斬りかかる。

無我夢中だった。迷っていた心を掻き消すかのように、夢中で敵兵を殺めた。

大剣や手足、身体、顔、返り血で全てが紅く染まっていく。

「わたしは……勝たなくてはならない……！」

“ 紅蓮炎纏刃 ”

炎を纏った大剣で目の前にいた敵兵を数人まとめて薙ぎ払う。粗方付近にいた敵兵は倒したようだ。

わたしは肩で息をしつつ辺りを眺めた。これだけ敵兵を殺めたというのに、次から次へと魔法兵が押し寄せて来ている。

「どうやら、聖の属性の上級魔法を使えるヤツが紛れてるみたいだな」

アイオンがレイピアに付着した血液を払うかのように切っ先を勢いよく振るいながら、そう漏らした。

「蘇生魔法であいつら……何度でも、何人でも蘇るぞ」

「なんだと!? それでは勝ち目など……!!」

「だから言っているだろう……この戦では傭兵など所詮『捨て駒』だ。単なる時間稼ぎでしかない」

「そんな……!!」

「だから、こんな戦……」

アイオンの言葉は大きな爆発音で遮られた。
まるで、スローモーションのようだった。ふわりと身体が紅蓮色
の世界を舞い、猛烈な痛みが全身を襲う。

最後に耳にしたのは戦友の悲鳴。

わたしの意識はそこでブツリと途切れた ……。

外伝 二人の傭兵(3)

次に目覚めたのは見知らぬ部屋の一角、ベッドの上だった。

身体を起こすと節々が激しく痛んだ。

その痛みが、どのくらい長い時間眠っていたのかを物語る。

「えっ！？ 嘘！？ 起きた！ 起きてる！！！」

声が出た方向に視線を移すと、腰ほどまであるプラチナブランドの髪を頭上で一つに括り、橙色の瞳を真ん丸と輝かせ、修道女の黒い衣装を身に纏った、年齢十五、六の少女が佇んでいた。

「良かったあああ…… “^{ピトル}治癒” がちゃんと効いたようね。このまま目覚めなかったらまた街の人に『似非修道女』って罵声を浴びせられるところだったわ」

少女は安堵のため息をついたかと思うと、嬉しそうにわたしの方に駆け寄ってきた。

「貴方ねえ、あと一步で三途の川渡っちゃうところだったのよ！ 血が色んなところからドクドクだったし、皮膚だってデロデロで大火傷だったんだから！ あのイケメンなお兄さんに感謝することね」

彼女はわたしの寝ているベッドの縁に腰を下ろし、人差し指を唇に当てながら話す。

……む。そうか わたしは確か戦場で魔法の直撃を受けたのだ。どうやら、危ないところを助けられたようだな。

「そつだ……！ 銀髪の男を見なかったか！？」
「銀髪？ 貴方、何も覚えていないのね」

彼女は「ま、無理もないかー」と言つてやれやれといった動作をした。

「貴方はその銀髪のイケメンなお兄さんに助けられたのよ！ 彼もドクドクでデロデロで今にも死んじゃいそうだったのに…… 必死で貴方に“治療”^{ヒール}を唱えながらここまで運んでくれたのよ。貴方をあたしに託したら力尽きちゃったけど」

「な……！ アイオーンがわたしを運んでくれたというのか！？
それで、彼は今無事なのか！？」

「ちよ、ちよ、ちよっと！ 落ち着きなさいよ！」

わたしは思わず彼女の両肩を掴んでしまっていた。慌てて手を離す。

「あのお兄さんも無事よ。でも、まだ意識は戻らないの…… 今は隣の部屋で眠っているわ」

そう言つて、部屋の奥にあるドアを指差した。

思わずベッドから抜け出そうとすると、彼女は「ストップ！」
と言い、わたしの胸をグツと押してベッドへと戻す。

「絶対安静！」

彼女はニコツと微笑み、わたしの腹の上にどさつと腰を下ろす。
その衝撃で傷口に痛みが走り。思わず「ぐぬううう！」と呻き声を上げてしまった。

「失礼ね！ あたしそんなリアクションされる程重たくないわよ！」
「ち、違うのだ……！ ぐふっ!？」

もう一度、お尻でどすんとされる。

「そうそう、あたしはシエリルって言うの。教会で修道女やってるわ」

「わたしはカイクだ。傭兵をしている」

「カイクかあ。貴方一週間も眠っていたのよ。そうそう！ あのイケメンなお兄さんはなんて言うの!？」

シエリルは足をバタつかせて、目をキラキラさせながら尋ねる。
足が動く度に傷口が痛んだが……また怒られてしまいそうだったので何も言わずにグツと堪えた。

「彼はわたしの戦友であり、親友のアイオンと言う。彼も傭兵だ」
「アイオン様かあ」

彼女はまるで林檎のような頬に手をやり、瞳をうつとりとさせてぼーっとしていた。

……自分の世界に入ってしまったようだ。

「……取り込み中すまないが、ここはどこなのだ？」
「うん？ ここはコルデスの街よ。カイクがどこに住んでるのか知らないけど、大きな街だし名前くらいは聞いたことあるんじゃないかしら」

「コルデスの街か……フローズンブリッジからずいぶんと離れてしまったな」

フツと妻の顔が浮かぶ。心配していることだろう……もしかしたら子供も既に生まれているかもしれない。肝心な時に傍にいてやれなかった。ポルタはわたしを恨んでいるだろうか……。

「カイルって雪国出身なのね！……まあ、がっちりした体の割には色が白かったからそんな気はしてたけど……あつ、そろそろアイオン様の治療の時間だわ！」

シエリルはびよこんとわたしの腹の上から床へと飛び降りた。やっと痛みから解放される……。

「じつとしてなさいよね！」

そう言い残し、彼女は部屋から出ていった。

部屋を見渡すと大きな棚に大小様々なヌイグルミが並んでいた。クマにイヌにネコに……なんだこれは？ よくわからない魔物のような生き物のヌイグルミまである。

小さな本棚には本がびっしりと詰まっていた。「修道女の生き方」「シスターとしての十力条」「聖属性の呪文百選」「かつこいい男の心を射抜く100の方法」「回復呪文の唱え方〈初級編〉」……変な本が混じっているような気がしたが、見なかったことにしておこう。

壁にはさつきシエリルが着ていた修道女の衣装が数着掛けてあった。どうやらここはシエリルの部屋らしいな。

「きゃわああああ……！」

！？

突如、隣の部屋からシェリルの絶叫が聞こえる。

「どうした!?!」

驚いてベッドから抜け出し、悲鳴の元へと急ぐ。

ドアを開けると、シェリルがアイオーンに勢いよく抱きついてい
る光景が目に入った。アイオーンは身体が痛むのか顔をしかめて小
さく呻いている。

アイオーンはどうやら無事に意識を取り戻したようだ。

彼はわたしに気付くと、嬉しそうに口元を緩めた。

「ア……アイオーン……!!」

「カ、カイクゴゴ……!!」

思わずシェリルに続き、彼を抱擁する。

「バツカ! 行ってえよ!!」

「ちょ、ちょっとカイクあんたじつとしてなさいって言ったじゃな
い! つーかアイオーン様に触れるなあ!」

「良かった……本当に良かった……!!」

ズキッ

「うぐっ!?!」

いきなり動いたせいか、身体中に激痛が走り思わずうずくまる。

「バカねえ。そんな身体で急に動いたらそうなるに決まってるじゃ
ない……二人共もうしばらく面倒見てあげるから、安静にしてなさ

い！」

シェリルはアイオンから身体を離し、腰に手をやりつつ、強く
そう言い放った。

……確かに、今の状況ではそうしてもらえないのはありがたいこと
だ。

わたし達は素直に彼女の好意に甘えることにした。

外伝 二人の傭兵（4）

目を覚ましてから数ヶ月が過ぎようとしていた。

わたしとアイオンの傷はほぼ完治した。

世話になったお礼と戦闘のリハビリを兼ねて、コルデスの街周辺に出現した魔物を討伐し、その肉を剥ぎ取り食料としてシエリルの元へと届ける。それを繰り返したお陰で、剣を振るう感覚もなんとか取り戻せた。

そこで、わたし達は故郷のフローズンビレッジへと戻ることを決めた。

シエリルは酷く落胆していたが、やがて笑顔を取り戻し「また遊びに来なさいよ！ 絶対だからね！」と言い、我々の背中をバシバシと叩いた。

我々は改めてシエリルへと深く礼を言い、故郷へと向かう馬車へと乗り込んだ。

「……あの日から、随分と月日が流れちゃったな」

アイオンが目を伏せながら呟く。

“あの日”とは、我々が戦場に赴いた日のことだ。

「もうすぐ終戦を迎えることになるだろうし、そろそろ傭兵も潮時だな」

そう言い、彼は口元を綻ばせた。

我々が参戦した解放軍と、敵対していた王国軍。戦力的には王国軍が圧倒的に有利だった。王国軍はもうじき勝利を収めることだろう。即ち、それは彼が言うように終戦を意味する。

「そしたらもう……ポルタさん泣かせるなよ」

ドクンと大きく心臓が高鳴った。きっと、わたしはバツが悪いかのような顔をしていたことだろう。

アイオーンはそんなわたしの目を真っ直ぐに見つめ、話を続ける。

「彼女は毎日お前の心配をしていた。傭兵なんて命がいくつあっても足りないような仕事だ。いつか、カイルがいなくなってしまっ日が来るのではないかと……俺に涙しながら漏らした事もあった。子供を身ごもってからは余計に不安だったんだろうよ。よく一人で泣いている姿を見かけた」

「そう……だったのか」

それは、本来だったら夫の自分が気付いてやらねばならなかった事だ。

妻の思いに今更ながら気が付き、胸が締め付けられる感覚に襲われた。

「……俺は、正直そこまで彼女に愛されてるお前が羨ましかった」
「アイオーン……」

アイオーンは自嘲のような笑みを浮かべ、目を伏せて話を続ける。

「魔法の直撃を受けた時、お前だけは絶対に生かさなければいけないって思ったよ」

「そうか……すまなかったな」

敢えて、理由は尋ねなかった。

アイオーンは長年の親友だ。言いたいことはある程度手に取るようにわかる。

彼はきつと、ポルタをこれ以上悲しませないように配慮してくれていたのだろう。

あの時も負け戦だという事を知っていた上で、傭兵としての誇りを貫こうと意地になっていたわたしを必死に降ろそうとしてくれた。いた。

「村に帰ったらお前もついに父親かぁ。しっかりと頑張れよな！」

「ああ……勿論だ！」

かっぱかっぱと馬の蹄音を一定に響かせつつ、馬車は軋みながらもゆっくりと着実に故郷へと向かって行く。

数週間後、馬車はフローズンビレッジへと到着した。

そこは相変わらず、深々と雪が降りしきっている。我々はそれぞれの家へと足早に向かった。

「ポルタ、戻ったぞ」

玄関で身体に付いた雪を払い、ギィと立て付けの悪いドアを開く。

妻は暖炉の前の椅子に座っていた。

腕には、毛布に包まれた赤子が抱かれている。

「あなた……」

「ポルタ、すまなかった……心配しただろう」

妻は赤子を揺り籠へと寝かせ、目を大きくさせてわたしの元へと駆け出す。

「ポル……がはっ!!?」

ゴツつと顎に衝撃が走る。気付けばわたしは妻に殴られていた。

「心配したなんてレベルじゃないわよ……!!」

その語尾は震えている。

妻の憤慨した表情は徐々に泣き顔へと変化し、潤んだ瞳の端からはポロポロといくつもの大粒の涙がこぼれ落ちていった。

わたしはそれを一粒指ですくい上げて、そつと妻を抱き締める。

「ずっと待ってた……信じてた。お帰りなさい……あなた」

「ああ……ただいま」

「……あなた、パパになったのよ……ほら」

そつ言って、妻はわたしの手を引き、揺り籠の傍へと導く。

「私達の娘、カレンよ」

「カレン、か……良い名だ」

カレンは揺り籠の中で小さな手足を懸命に動かしていた。柔らかくなだくブラウンの髪、白い肌、長い睫毛、大きな瞳。それは、まるで……

「まるで、ポルタの生まれ変わりのようだ……」

わたしは、慣れない手つきでカレンを抱き寄せる。

その愛おしい命は、自分が思っていた以上に温かかった。思わず顔がほころぶ。

「カレン、パパだぞ」

カレンはぼんやりとわたしの顔を見つめていたが、やがて、顔をしかめ出したと思ったたら大きな声で泣き出してしまった。

「き、き、嫌われてしまったのか……わたしは!？」

「ふふふ、お腹が空いたのかしらね」

妻はカレンをそつと膝の上へと移し、授乳をし始める。

そこにあつたのは、幸せな家族の光景。

傭兵をしていた頃には想像も付かなかった幸せがあつた。

命とは、こんなに温かくて、愛おしいものだったのか。

外伝 二人の傭兵（5）

時は流れ、カレンは今年ついに十歳の誕生日を迎える。

わたしとアイオーンは傭兵を辞職後、コルデスの街で雇われ剣士として働いていた。

数ヶ月に一度、コルデスの街へ行き周辺の魔物を一掃するという仕事だ。

「父様、またどこかに行っちゃうのですか？」

カレンが寂しそうに眉をひそめながらわたしに尋ねる。

「お仕事に行ってくるだけだよ。すぐに戻る。母さんの言うことちやんと聞くんだぞ」

「わかりました！ カレン、良い子にしてるのです！ おじちゃんも気を付けてね！」

「おう！ 戻ってきたらまた一緒に飯食おうぜ、カレン！」
「うんっ！」

わたしは荷物を馬車へと積み込み、アイオーンは手入れを終えたレイピアを腰の鞘へと差し込んだ。

「よし、それでは行ってくる」

「行ってらっしゃい！ 二人とも気を付けてね」

「おうよ！ また戻る頃にご馳走の準備よろしく！」

「ふふっ、わかっているわ。美味しい物たくさん用意して待ってるから、楽しみにしている」

「よっし！ たらぶく食うぞー！」

「まだ気が早いぞ、アイオーン」

しかし、アイオーンがポルタの手料理を食べることは二度と
なかった。

「大変なのよ！ このままじゃ街が全滅かもしれないの！！」

プラチナブランドの長い髪を振り乱しつつ、声を荒げたのはシェ
リルだった。

彼女の話によると、コルデスの街付近にあるラウルの森で二つの
首を持った獣が暴れているらしい。

そいつは餌を探して何度か森から抜け出してきた、街の住民を数
人食べてしまったと言う……。

被害が広がる前に討伐しておいたほうが良さそうだ。

我々が引き受けると、シェリルは安堵のため息を漏らし「ありが
とう」と微笑んだ。

ラウルの森は昼間だというのに薄暗く、じめじめとしていた。足元には、小動物の物と思われる骨が散乱している。

「小動物も魔物も気配を感じないな。随分と大食漢なこつた」

「このぶんだと、また街に現われるのは時間の問題のようだな……」

骨を避けつつ森の奥へと向かって歩くこと三時間。

わたしとアイオンはほぼ同時にそれぞれの剣の柄へと手を伸ばす。

「殺気……だな」

「おうおう、相当腹が減ってやがるみたいだな。俺達は差し詰めのことやってきた餌つてとこか」

森の闇の中で獣が低く唸っている。その存在が少しずつ我々に近づく。

「……カイク、来るぞ!!」

ザアツつと音と共に素早く獣が茂みから飛び出し、わたしへと飛び掛かる。

すかさず大剣を弧を描くように横薙ぎに払う。

しかし、獣はわたしの剣を踏み台にして高く跳躍して回避する。

「身軽なこつた!」

“ 地獄^{ヘルフレア}の業火 ”

アイオンが左手を掲げるとほぼ同時にわたしは地に伏せる。

けたたましい轟音と共に獣目掛けて野太い火柱が立ち上る。

「アイツ……身を翻して上手く避けやがったな」

彼の視線を辿ると、木の上でこちらの様子を窺っている獣
いや、双頭獣がいた。

やがて、ヤツは勢いよくそこから飛び降り、森の静寂の中へと紛
れて息を潜めた。

「おいおい、かくれんぼか？」

「油断するなよ、アイオーン」

我々は背中合わせになって、それぞれ剣を構えて相手の出方を窺
う。

右か……左か……正面か……。緊張で大剣を握る手の平に汗が滲
む。

ザアツと再度茂みから飛び出した双頭獣は木を使って高く跳
躍したかと思うと、頭上からまるで槍のように向かって来た。……
その俊敏な動きに我々は完全に意表を突かれてしまった。

鋭い爪の切っ先は見事アイオーンの右腕に炸裂する。

「ぐああっ　　！！」

「アイオーン!？」

彼の右手に握られていたレイピアが吹き飛ばされ、地面へと突き
立つ。

アイオーンは右腕を押さえてもんどりうって倒れ込み、苦しそう
な唸り声を上げた。

腕は深く切り裂かれてしまったようで、抉れた部分からは白い骨が見え隠れしている。

双頭獣は着地して態勢を立て直したかと思うと、即座にわたしに向かつて鋭い牙を剥き出しにして飛び掛かった。

「ぐっ……っ！」

ギリギリのところで大剣を盾にしてそれをかわす。

攻撃を弾かれたヤツは、尚もその攻撃の手を休めずに身を翻したかと思うと、アイオーンの左足へと牙を突き立てた。ミシミシと骨の碎ける音が鈍く響き、彼の苦悶の叫び声が森中に響き渡る。

「アイオーン　……！！！」

彼の左足は膝から下が無残にも変な方向に捻じれ曲がっていた。

赤黒い血液が彼の着用していた黒のスラックスを染め上げていく。

その衝撃的な光景を目の当たりにしたわたしは、怒りの衝動に駆られ反撃に出ようとしたが、その様子を嘲うかのように双頭獣がクルクルとアイオーンの周りを走り出す。迂闊に攻撃をしたら彼まで巻き込みかねない……！！

動けずにいたわたしに、アイオーンは途切れ途切れにこう告げる。

「なあ、カイク……俺、使えるようになったんだぜ……“大爆発”
エクストロージョン

……」

「アイオーン……っ！」

その魔法は……あの日、我々が直撃を受けた上級魔法だ。

そんな広範囲に威力を發揮する魔法を近接する相手に使ったりな

んかしたら……！

「コイツ、俺から離れる気ないみたいだし……この出血量じゃ、どうせ……もう助からない」

「何を言っている……！ まだ諦めるのは早い……！」

「コイツは森を知り尽くしてるはずだ……賢いようだし、何か意表を突くような回避方法を取るかもしれない……万が一仕留められなかった場合は……頼んだぞ、カイク」

「ダメだ……！ アイオーン……！」

アイオーンは左手を高く掲げる。

「ポルタさんとカレンによろしく言っておいてくれ！」

彼は二カつと微笑み、一気に詠唱を始める。

“テレポーション転移魔法”

「アイオ」

言い終わる前に、わたしの視界は眩い純白の光で遮られた。

「……………は……………？」

頬の上を流れる風の感覚で目を覚ます。

まっさらな緑色の平原のど真ん中に、わたしは大の字で突っ伏し

ていた。

「アイオン……！」

遠くに見える森から立ち上る黒煙が、まるで意志を持った生き物のように禍々しく蠢うごめいている。

「そんな……まさか……嘘だろう!？」

その瞬間、全てを理解した。

目の奥が熱くなり、鼓動が激しく鳴り響き、胃液が喉元まで込み上げる。

一度は命を掛けてわたしを守ってくれた恩人を……わたしは見殺しにしてしまった……！

自分の無力さが何よりも悔しく、憎い。

ドン！ と地面を思い切り叩き付ける。手の平にジンとした痛みが走った。

アイオンはもう、痛みを感じることもない。笑うことも……怒ることも……悲しむことも……！

「すまない……すまない……すまない……っ!！」

アイオンを失った喪失感に気付いた時、止まっていた涙が堰を切ったように溢れだした。

一頻り泣いた後、わたしは再度歩み出す。
ヤツが死んだのか、確認しに行かねばならない。

「万が一仕留められなかった場合は……頼んだぞ、カイク」

親友の遺言だ。

せめて、せめて……それだけは……！

背中 of 鞘から大剣を引き抜き、大地へと突き立てる。
空を見やれば、夕日が赤黒く燃えていた。
その炎で刀身を照らし、わたしは復讐を誓った。

第9話 胡散臭い科学者

ラウルの森を出てから早一カ月。
俺達が火纏樹ほていじゆの森に近付いているということを気温が教えてく
れていた。

「暑い……暑過ぎるぜ……」

「おい、それは禁句だと言っただろう……」

熱帯地帯を二人とぼとぼと歩く。

暑さのせいで、顔からも身体からも玉のような汗が噴き出してい
る……髪が額に張り付いて気持ちが悪い。色男が台無しってもんだ
だけど……。

女の子が汗に濡れた姿というのはなかなか絵になるなあ、うん。

シルビアちゃんは暑さからか上着を脱いで、それを腰に括っ
た。身に纏っているのは胸から上の肩、腕、背中を露出させた黒い
ドレス一枚だけだ。滴る汗が胸の谷間へと吸い寄せられてなんと
艶めかしい……！

「……どこを見ている？」

視線に気が付いた彼女は、俺の顔をキッと睨み付けた。

「大体なんで、こんな暑い所に来なくてはならないのだ……」

暑さのせいで俺を殴る気力もないようだ。彼女は俯いて何かぶつ
くさ言っている。

何故こんな思いしてまで火纏樹の森まで来たのか……それにはちゃんと理由があった。

「シルビアちゃん、あーっーいーよー、暑い暑い暑い暑い暑いー」

俺は殴られないのいいことにシルビアちゃんをからかう。すると、彼女は眉間に深くしわを寄せつつ、剣の柄に手を掛けた。

「えっ!? お、俺を斬るつもりなの!?!」

「違うわアホ! よく前を見る!」

心なしかシルビアちゃんの言葉遣いが幾分か悪いような気がするが、スルーしておこう。

前方を見やると、厩気楼で歪んだ景色の中に人影のようなものが揺らめいている。どうやら誰かが地面に突っ伏しているようだ。

「ああ、あれは多分行き倒れてやっだろうね」

「行き倒れ? 敵ではないのか……」

「きつとこの暑さで参っちゃったんだろう。それが、行き倒れを演じた盗賊かもしれない……放っておいた方がいいよ」

俺達は人影を避けるようにして再度歩きだした。

「おい、あれ……」

すると、またしても前方に人影が揺らめいていた。シルビアちゃんが怪訝そうな表情を浮かべてソレを指差す。

「しつこい行き倒れだね」

「怪しいな……」

俺達は再度回り込むようにして人影を避けて歩く。

「……………」

すると、またまた前方にその人影は現れた。

シルビアちゃんは暑さとソイツのしつこさに怒り心頭のような。小さな肩がわなわなと小刻みに震えている。このままじゃ本当に斬りかかりかねない。

「ちよつと俺行ってくるよ」

それを察して、俺は様子を窺うために人影へと近付いた。ソイツはちらちらとこっちの様子を窺っているようだ。

本当に盗賊かもしれない……城からモニターで人間界を観察していた頃もこの手の盗賊は何度も見てきた。

俺はいつでも魔法が使えるように、魔力を右手へと込める。

「おい！ お前一体何して……うおっ！？」

ギリギリまで近付いて髪を掴み上げようとした瞬間、伸ばした俺の左手をソイツはいきなり両手でガシツと掴んだ。

「やーっつと僕のこと助けてくれるのですね！！？？」

「ななな、なんだよコイツ……！？」

俺の左手を掴みつつ、ソイツはがばつと勢いよく顔を上げた。

見た感じ、齢五十くらいのオッサンだった。薄汚れて所々茶色くなっている白衣を身に纏い、黒縁の眼鏡を掛けていて、無精髭を生

やしている。そして、肩に付くくらいの赤茶色の髪を一つに括っていた。

「あの、僕、道に迷ってしまっ……その挙げ句、飲み水も食料も尽きてしまって困ってたんです！」

「へー、そうなんだ」

俺は掴まれていた左手を振り払い、さっさと歩き去ろうとした。

「待ってください！ このままじゃ僕、本当に死んでしまいます！」

「んなこと、俺が知ったこっちゃねえよ！」

男は俺の腰を背後からがっちりとホルドする。

コイツ、生白くてひよろひよろな体つきの割りに腕力だけは無駄にありやがる……！

「おい、離せよ気色悪い！」

「ううう……せめて、せめて、火纏樹の集落まで連れて行ってください……お願いしますっ！」

「……火纏樹の集落、だと？」

どうやら、男の行き先は俺達と同じようだ。

殺気は全く感じ取れないし……盗賊ではないだろうな。
だが、怪しいヤツには変わらない。

「……お前、何者だ？」

「申し遅れました……僕はフリード！ リンブルグでエネルギーの研究してる科学者です！」

科学者だと？ しかも、リインブルグつつたら人間界どころか、魔界でも有名な文明の発達に力を入れてる大きな都市だ。

こんなボロ雑巾みたいなヤツがそんな所で科学者やってるとは到底思えない。

「ったく……もうちよつとましな嘘吐けよな」

「ひ、ひどいです！ 嘘なんて吐いてないですよ！」

男は俺の腰に顔を擦り寄せながら涙やら鼻水やら流している。

「だああつ！ 汚ねえやめろ！！」

「あぐつ！！！」

思わず肘で思いつ切り男の脳天をど突く。

ヤツは頭を押さえこみながら仰向けに倒れ込んだ。

……ん？

倒れた瞬間に白衣のポケットから四本の赤い棒きれが一括りにされた物が飛び出した。その中心には小さなモニターのような物が付いている。

「なんだ、これ？」

「あああああつ！ 触ってはいけません！！」

フリードは慌てて飛び起きて、その棒きれを大事そうに抱えた。

「危ない危ない……これはラナのお手製ですからね。破壊力抜群なんですよ」

「ラナ？ 破壊力？」

「い、いえ……何でもありません」

彼はそそくさと棒きれをポケットに戻す。やっぱりコイツ……どこか怪しいな。

「おい、サタン。まだ話は終わらんのか？」

「あ、シルビアちゃん……」

「おおおおお　！　これはこれは、素晴らしく美しい御方ですね！……」

フリードは鼻息を荒くして、眼鏡をくいくいと中指で頻りに持ち上げながら、シルビアちゃんの身体のラインを舐めるように眺める。普段だったらそんな光景を見たら苛々するんだろが……今、彼女の機嫌がどれだけ悪いかを知っている俺は、心の中でクククと笑った。

「なんだこの変態オヤジは！？」

「おぐうっ！！」

シルビアちゃんの飛び膝蹴りがフリードの顎にヒットして、彼はずぎーっと後ろに吹き飛ばされた。

「ふふっ……なかなかいい蹴りでした……チラッとパンツも見えましたが……僕はもう満足です」

フリードは仰向けに倒れたまま、唇の端から血を流しつつ、笑顔で何か呟いている。

もう放っておこう。ここのヤツは大抵関わると面倒なことになるんだ。

「シルビアちゃん、行こう」

「あゝ

「あつ！ ちょ、ちょっとー！ 待ってくださいーい！！」

俺達はフリードの事は無視して、集落への道を再度歩き始めた。

第10話 理由

あれから更に数時間歩き、目的地は目前にまで迫っていた。厩気楼で歪んではいるものの、炎のような物がはつきりと目視出来る。

恐らく、あれが火纏樹ほていじゆだろう。

火纏樹というのは、その名の通り火を纏った木の事だ。実際に燃えているのは、カラツカルと呼ばれる火纏樹になる実で、枝から落ちるまでは延々と燃え続けるらしい。

「おおおおお、見えてきましたね……！ あれが火纏樹！ 僕、初めて見ましたよー！」

フリードは、俺達の後ろをずっと付いて来ていた。後ろでずっとオーバーリアクション気味に何かをしゃべっていたが、相手すると体力を消耗するので放置している。

「いやあ、まさか本当に連れてきて下さるとは、サタンさんもシルビアさんも本当は優しんじゃないですか！ お礼がしたいので後程是非ともリインブルグに立ち寄って……」

「リインブルグだと？」

シルビアちゃんがピタリと足を止める。

「そうです！ 特別に研究室を案内致しますよ！」

「あの都市は研究に携わる人間以外は入れないはずだが……」

「失礼、シルビアさんにはまだ言っておりませんでしたね。僕はそこでエネルギーの研究をしているのですよ。なので、僕の紹介があればリインブルグに貴方達を案内することが……」

「本当か！？ 本当にリインブルグに入れるのか！？」

彼女は瞳をらんらんとさせながら、笑顔でフリードの両肩を掴み前後に激しく揺さぶる。

「むふふふ……いくらでも僕がご案内しますよー！」

「私はリインブルグの最先端技術で作られた剣というのを一目見るのが夢だったんだ……！ まさか、こんなに早く叶うとは思っていなかった！」

「ぐふふふ……そんなことお安いご用でございまぐふつうっ……！」

俺は至近距離でシルビアちゃんの胸の谷間を凝視していたフリードの脳天に肘鉄を食らわした。

その衝撃で舌を噛んだらしく、ヤツはすかさずしゃがみ込んで口を両手で押さえつつ「ぐぬう」と低く呻いている。ざまあみる。

シルビアちゃんはそんな事になってるとはつゆ知らず、嬉しそうにニコニコと微笑んでいた。

「シルビアちゃん……コイツが本当にリインブルグの人間か怪しいと思うぜ、俺」

「そうか？ 私は可能性があるならそれにすがりたいと思っている。あの場所の関係者じゃなければ侵入不可能だからな。以前無理やり入ろうとしてえらい目に遭った」

彼女はフツと自嘲しつつ、遠くを見つめた。

どれだけリインブルグに入りたかったんだろう……。

そうこうしているうちに、俺達はようやく火纏樹の集落　ランガルへと到着する。

そこは、火纏樹を一目見ようと各地から訪れている観光客でずいぶん賑わっていた。宿屋が妙に多いのはそのせいだろう。一人でも多くの客を確保しようとするところも必死で呼び込みをしている。

また、色とりどりの氷菓子が所々で売られていて、どの店でも列を作っていた。この暑さだ……冷たい食べ物には飛ぶように売れるだろう。ランガルは商売上手が多い所のようにだな。

「それにしても暑いーな。さっさと宿取って風呂入ろうぜ」

「……賛成」

「賛成です！」

「おい、ちょっと待て」

さり気なく、フリードまで一緒に宿に泊まるうとしているのを俺は見逃さない。

「お前まさか一緒に宿に泊まる気じゃないだろうな？」

「え？　ダメなんですか？」

「当たり前だ！！　お前なんかいたら俺の計画が……」

「計画？」

「だああっ！　とにかくダメだ！」

「おぐふうっ！！」

俺の拳がヤツの右頬にヒットして、その衝撃で吹っ飛ばす。懲りない奴だ……。

その隙にシルビアちゃんの手を引いて宿へと向かう。後ろで「サタンさーん！　シルビアさーん！　捨てないで下さーい！！」とい

う悲痛な叫び声が聞こえたが、気にせず足を進めた。

俺達は自生している火纏樹の一带に一番近い宿を取る。

暑いからかその宿屋は殆ど客は入っていないかった。普段だったら俺もこんな場所選ばないが、今晚だけは特別だ。

部屋の中は、小さなベッドが二つとクローゼットが一つ、窓際にサイドテーブルが置いてあるだけというシンプルな内装だった。

俺とシルビアちゃんはとりあえず風呂を済まし、給仕に酒を頼んで夕日の差し込む窓際のテーブルで共に晩酌を始めた。

カラツカルの実を発酵させて作った赤い果実酒を彼女はちびちびと飲みながら頬を赤く染めている。

俺もそれと同じものをぐいぐい喉へと流し込む。酒を飲むのは久しぶりだった。

「サタンは、なぜ魔法使いになったのだ？」

シルビアちゃんはグラスを傾けながら、視線だけを俺に向けて訊ねた。

「……そうだなあ。強くなりたかったから、かな」

実際は魔法使いではなく魔王なんだけど……その理由は本当だった。

彼女は「そうか」と呟くように言って、そっとグラスに口を付ける。

「シルビアちゃんはさ、どうして勇者になったの？」

「魔王を倒すためだ」

彼女は表情一つ変えずに鋭く言い放つ。

わかつてはいたんだけど……やっぱりその言葉は胸にグサツと突き刺さる。

俺は彼女の宿敵なんだ。

「魔王の事、嫌い？」

「当たり前だ」

「魔王の事、憎い？」

「当然だ」

眉間に深くしわが出来ると「次気に障る事言ったら殴るぞ」という合図だ。

「どうして魔王が憎いの？」

俺の問いに予想通り彼女は握りこぶしを作ったが、一拍置いてそれをゆっくりと解いた。

「私の故郷は魔族に滅ぼされた」

「えっ？」

予想しなかった一言に、思わず気の抜けた声を漏らしてしまう。

「何人もの人間が目の前で殺されていった。何も出来ずに震えながら隠れていた自分が惨めだった」

彼女は窓の外をじっと見つめる。夕焼けがうつすらと涙を滲ませた瞳に反射していた。

そして、剣の柄へと手を伸ばして話を続ける。

「だから、私は悪の根源を潰して、魔族を根絶やしにすると誓ったんだ」

その声色は、強い決意を込めたようだった。

「魔族が故郷を滅ぼした……だと？」

俺は魔族に町や村を破壊するように命じたことは一度もなかった。せいぜい、魔物を定期的に人間界に仕向ける程度だ。

人間界に来て色々な不可解な事が起こっているとは思ったが

……。

バラバラだった糸が徐々に繋がっていく。それは“第二の魔王”の存在を示していた。

俺の知らない所で随分と好き勝手にしてくれたようだな。無意味な殺生というのは、いくら魔界で生きる者がしたとしても美しくはないものだ。

しかも、よりもよって愛する女の故郷を奪ったとは……二度と悪さが出来ないように、偽物魔王にはキツイお仕置きしてやらないといけないな。

「さつきから難しい顔してどうした？」

「……シルビアちゃん、一緒に魔王倒そう！」

「えっ!？」

シルビアちゃんは俺の突然の申し出に目を見開いて驚いていた。

「俺の強さ、そろそろ大切な人を守るために使うのもいいかなって思ったんだ」

「……だが、いくら強いとはいえ相手は魔王だ。命を落とす可能性

だつてあるんだぞ」

「だったら、ますますシルビアちゃんを放つてはおけないよ」

「サタン……」

良い雰囲気になってきたところで、突如ぐらりと視界が歪んだ。

「お、おい！ サタン！？」

慌てるシルビアちゃんの声が響くのと同時に、椅子ごと後ろにひっくりかえる。

忘れていた。俺は下戸だということ。

テーブルの上の果実酒を恨めしく睨んだところで、ふつりと俺の意識は途切れた。

第11話 聖剣オルカント

「ぐっう……」

激しい頭痛に襲われて、俺は目を覚ます。

どうやらシルビアちゃんがベッドまで運んでくれたようだな。

しかし、ちよつとばかり飲み過ぎた……果実酒だからって甘く見すぎたか。

辺りは既に真っ暗だった。熱帯夜のせいか、身体中に汗を掻いていて不快極まりない。

「……！ そう言えば」

慌てて身を乗り出すようにして窓を開ける。

火纏樹ほていじゆの周りにはふわふわと赤色の光が多数漂っていた。幻想的な光を放つソレはカラツカルの“種”だ。

この光景はとても珍しく、数年に一度、今の時期の夜中にしか見られないものらしい。以前魔界のモニターを通して観たテレビでそう特集していた。せつかくだからこの幻想的な光景をシルビアちゃんと楽しもうとしてランガルにまでわざわざ足を運んだわけだ。

そして、ムードが高まったところでアレヤコレヤと傾れ込んだじゃう展開を期待していたのだが……。

肝心な姫様は俺の隣で可愛い寝顔を惜し気もなく晒して、すやすやと眠っていた。

……いや待て。

ベッドは確かに二つあったはずだ。それなのに、シルビアちゃんは俺の隣で寝ている。

「シ、シルビアちゃん……?」

恐る恐る声を掛けるも、彼女は「うん……」と短く呻いて寝返りをうつただけだった。

寝呆けてこっちのベッドで寝ちゃったんだろうけど……俺の手の平ですっぽりと包み込めそうなサイズの胸が、容赦なく目の前で誘惑している。

「……俺だつて男なんだぞ? そんなに無防備になるなよ」

そつと頬を撫でると、再度短く呻いて寝返りをうつた。……その拍子に、彼女の手の平がちょうど俺の股間の上へと場所を変える。

「はうあつ……!?!?」

思わず、今まで出したことのないような奇声を発してしまつた。

待て待て待て!

これは有罪だぞ。何されても文句言えないぞ。どうなつても知らないぞ。

だが、万が一ここで彼女が目を見ましたら……間違ひなく俺はあの世を見ることになるだろう。

迷う心をよそに、身体は素直に欲望へと従う。シルビアちゃんの手の平の下で俺の下半身は大変なことになっていた。

「ごめんシルビアちゃん……ちょーつとばかり失礼させてもらつて」

俺は馬乗りの体勢に持ち込んで、ゆっくりと彼女の胸元からドレスの中へと左手を突っ込む。汗でしっとり濡れた柔らかい感触が俺の手の平を包み込んだ。

右手はスカートへと潜り込ませて太ももを撫で上げる。
チラリと彼女の様子を伺うが、相変わらず規則的に寝息を立てている。酒を飲んだせいかな、深く眠っているようだ。

「くくく、ほぼ計画通りだ……もうちょっとだけ失礼させてもらおうか」

右手をすすると更にスカートの奥へと進める。そして、もう少しで最深部へと達しようとした時……。

「サタンさーん！ 起きてます！？ 外キレイですよー！」

ドンドンというけたたましいノックの音と共に、聞き覚えのある下品な男の声が聞こえた。

「……なっ！？ なんでフリードがここにいるんだ!？」

「う……ん……?」

そして、俺の下でされるがままになっていたシルビアちゃんの瞳がぱちつと開かれる。

「あ……お、おはようシルビアちゃん」

彼女の視線は、俺の顔と手の位置を数回行き来して、ようやく現状を理解したのか唇をギリッと噛み締めつつ不気味な笑みを浮かべる。

「おはよう? 『おやすみ』の間違いだぞ……サタン」

「あぐううっ!」

腹を足で思いつ切り蹴り上げられて、俺は華麗に宙を舞って床へと激突した。部屋が薄暗くてパンツの柄がよくわからなかったのが悔しい。

「あれ？ もしかして、お楽しみ中でしたか？ いやあ、お邪魔しちゃいましたねえ」

「おぶっ！」

フリードはずかすかと部屋へと入ってきたかと思えば、すました顔をして床に仰向けに倒れていた俺の腹の上で立ち止まった。

「何も楽しんでいない。それより、何故フリードがここにいる？」

「いやあ、寂しくてうつかり同じ宿を取ってしまいましたね……そんなことよりも！ 今宵は“焰ほむの夜”ですよ！！」

「焰の夜？」

「おい、とりあえず……そこをどけ」

フリードの足下で最大限の殺気を放つ。

「おおっと！ これはこれは失礼致しました……いやあ、部屋が薄暗かったのとサタンさんの胸板が床板のように硬かったので、全気が付きませんでしたしぐほあっ！！」

「んなわけあるか！」

俺はフリードの膝辺りに蹴りを入れる。ヤツは前のめりになって顔から床に突っ込んだ。

「お、おい！ サタン、外を見る！」

そんなことはお構い無しという感じで、シルビアは窓の外を指差

しながら、目を限界まで見開いて驚愕の表情を浮かべている。

「ま……まさか、これは魔法か？ また魔族なのか!？」

「ちょ、ちょっと、落ち着いてシルビアちゃん!」

火纏樹の周辺を漂う無数の赤い光を見て、彼女は即座に剣を構え、窓枠に片足を掛けてそこから飛び出そうとしていた。俺はそんな彼女の腰を抱え込むようにして引き止める。

普通の女の子だったら、このロマンチックな光景に思わず息を呑むシーンなんだろうが……。

まあ、そういう血気盛んなところも嫌いじゃないんだけどな。むしろ好きだけだな。

「これこそが焔の夜！ 漂っている火の粉のようなものはカラツカルの種で、数年に一度、しかも五日間程しか見られないという珍しいものなんですよ！ 恋人達が永遠の愛を誓うのに適した夜でもありまして、別名“性なる夜”とも呼ばれています!」

フリードはうつ伏せの状態のままだがぱつと上半身だけを起こし、鼻血を垂らした顔でニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら俺とシルビアちゃんの顔を交互に見つめた。

俺は満更でもない表情でシルビアちゃんに視線を送ったが、返ってきたのは突き刺さるような鋭利な視線だけだった。

「この感じなら、良い核が手に入りそうですねえ」

「核?」

立ち上がって、パタパタと服の汚れを払いながら嬉しそうにフリードが呟く。その言葉の中に聞き慣れない語句が混ざっていたからか、シルビアちゃんは眉を潜めた。

「ええ。伝説の剣“オルカント”を作るには火水地氷風の核エネルギーが必要でしてね」

「で、伝説の剣……だと!？」

シルビアちゃんは「さつさと詳細を話せ」と言わんばかりにフリードにずいずいと詰め寄る。

「ぐふふふふ……そんなに近寄らなくてもお教え致しますよ」

ヤツは相変わらず眼鏡をくいくいさせながら、彼女の胸の谷間を穴が開きそうなくらいに凝視していた。

俺はすかさず彼女の両肩を掴み、後ろに数歩下がらせる。

「オルカントとは、それはそれは素晴らしい切れ味を誇る聖剣でしてね。特に、魔族に猛威を振るうと言われているのです」

「魔族にだと……!？ 魔王退治に持って来いじゃないか」

ぞくつ。

背筋に悪寒が走る。

その剣の名前には聞き覚えがあった。俺も書物の中でしか見たことではないのだが、聖剣とは魔族が少し刃の部分に触れただけで、その触れた個所が溶け落ちてしまう程の強力な代物らしい。オルカントはその聖剣の中でも特に威力が優れていて、数ある伝奇の中でも多くの勇者の愛剣として書かれていた。

ただ、そんな威力を発揮する剣が実際に存在するとは思えない。

「オルカントだって？ んなもん、伝奇の中だけの存在だろ」

「いいえ、長年の研究を経てついに作り方が解明されたのです！」

……おっと、今は極秘事項だったので大っぴらには言えないのですけどね」

そう言って、フリードはぐぶぐぶと相変わらず下品な笑い声を漏らす。

作り方が解明された……だと？ コイツの話はなんとなく信憑性に欠けるからなんとも言えないが、もしそれが本当だとしたら俺たち魔族にとっては一大事だ。

「私は、是非ともその剣を作るのに協力したい」

「シ、シルビアちゃん!？」

「おおおおおお！ 僕は貴女がそう言うてくださるのを待っていましたよー!!」

フリードがシルビアちゃんに抱擁しようとして両手を広げて一歩踏み出した瞬間、俺の足は即座にヤツの股間目掛けて蹴りをかましていた。

ヤツは顔を青ざめながら股間を押さえつつ膝から崩れ落ちる。声も出ないような痛みだったようだ。まあ、俺も男だしどれ程のダメージかはわかるわけだが。

「魔王を倒すためだ。それくらいの威力を発揮する剣が手元にあつたら申し分ないだろう」

「うーん……シルビアちゃんがそう言うなら仕方がない。だが、彼女に手を出したら俺は許さんからな。変態科学者!」

フリードは蹲すくつたまま、弱々しく「はひ……」と声を漏らした。

第12話 大炎蜘蛛

フリードの話によると、ランガルの東に紅蓮大樹くれんたいじゆというでかい火纏樹ていじゆが一本だけ生えていて、焰ほむひの夜が続く五日間の間だけその根元に大穴が開き、地下の洞窟へと入れるようになるらしい。

その最奥に“火の核”が眠っているのだが、それを守っている炎の魔人がいるので倒してくれとのことだった。ずいぶんと人任せな話だ。

翌朝、俺たちは宿を後にして、さっそく紅蓮大樹を目指すことにした。

「ランガルを出て半日ほど歩けばそこに辿り着くと思います。いやあ、一人では心細かったので本当に助かりました」

フリードはしげしげとシルビアちゃんの尻を見つめながら言う。
コイツ……まさかとは思うが、最初から尻を拝みたくて女勇者探してたんじゃないだろうな？

俺が一睨みすると、フリードは夜中の出来事を思い出したのか、まるで蛇に睨まれた蛙のように身体を硬直させた。

朝の日差しとはいえ、ここは熱帯地帯だ。太陽は既にジリジリと肌を焦がし始めている。こんな暑さの中でコイツの言動にいちいちイラついていたら身が持たないだろう。

俺はフリードにシルビアちゃんが万が一手を出されても素早く対処できるように、彼女の隣に歩み寄った。

「伝説の剣に、火の核に、炎の魔人か。いよいよ、本格的に冒険っぽくなってきたな」

朝早かったし、この暑さだからってつきり元気がないとばかり思っていたが、彼女の足取りは軽く、晴れやかな表情を見せていた。怒っていない彼女の顔を見るのもなんだか久し振りの気がする。

「そうだねえ」

そんな彼女を見やって、俺も表情を緩める。

空を仰ぎ見ると、火食鳥ヒクイドリが数羽群れを作って飛んでいた。空の青と火食鳥の赤のコントラストが映えている。

「火食鳥は不死鳥フエニックスのひな鳥と言われているのですよ。噂によると肉が柔らかくて絶品らしいのですが……あんな燃えた鳥どうやって捕まえたんでしょうね。ましてや、伝説の霊鳥のひな鳥と言われている火食鳥を一体どんな人間が最初に食べようとしたんでしょうか……ぐふふふふ」

俺の視線の先を辿ったのか、フリードは訊きもしないのに火食鳥について語りだした。相変わらず饒舌じょうぜつなヤツだ。ついつい片方の眉尻が上がってしまったが、苛立つ気持ちをグツと押さえこむ。ヤツはいつまでもぺらぺらと一人で何か喋っていて、一向に話が終わる気配がなかった。

気を紛らわせるために、再度シルビアちゃんの方に視線を向ける。彼女はきよるきよると周りの景色を見まわしていた。熱帯地帯特有の珍しい形をした植物や、普段見掛けないような色をしたサソリやトカゲ等の生き物を見つける度に感嘆している様子から、こういつた場所に来るのは初めてなのだろう。

「おお、あれはなんだ？」

また新たな発見があったのか、シルビアちゃんが瞳を丸く見開き

ながら何かを指差す。

「どれどれ……」

俺も彼女の指差す方向へと焦点を合わせる。すると、そこには……。

「お、おい……どういうことだ!？」

この暑さの中、体中にぞぞぞつと鳥肌が立つ。

クマ……いや、クマ程の大きさをしたクモがぞろぞろと列を成していたのだ。

漆黒の体色に、腹の紅い渦巻模様……それに、手足が燃え上がっているところからアレは“大炎蜘蛛”フレイムスパイダーに間違いない。確かにコイツらを熱帯地帯全域に配置した記憶はあるが、こんな大群を率いた記憶はないぞ……!」

「おおおおお、あれは大炎蜘蛛ですね! 猛毒を持っているので噛まれないように気を付けてください!」

フリードが、シルビアちゃんの背中に隠れるようにしながら言い放つ。

「コイツら、一体どこに向かってやがるんだ?」

「うーむ、どうやら僕たちと同じ方角に向かっていているように見えま
すねえ」

ヤツは眼鏡を中指で持ち上げつつ、目を細めて行列の先を眺めていた。

紅蓮大樹に向かっている、だと?

「おい、どうしてそこに向かっているんだ？」

「いやあ、流石に僕もそこまではわかりませんねえ。なんせ熱帯地帯こに来たのも初めてですから！」

フリードは何故か胸を張って答えた。多弁なくせして重要な箇所の知識はないのか……。

「この蜘蛛、倒すのか？」

「大炎蜘蛛はこつちが下手に攻撃しなければ襲ってくることはないでしょう。多勢に無勢。戦ったとしても圧倒的に不利なのでここは無視しましょう。“虫”だけに“無視”……ぐふっ、ぐふふふ」
「そうか。倒さないのか」

シルビアちゃんはどこか残念そうに、柄に掛けていた手を離れた。フリードはいかにも「自分は今、上手い事を言ったぞ！」とばかりに誇らしい笑みを浮かべていたが、反応がない事に気が付いたのか、肩を落としながら嘆息たんそくを漏らす。

「とりあえず、コイツらをあんまり刺激しないようにして、俺たちは俺たちで紅蓮大樹を目指そう」

俺の声掛けに二人は小さく頷き、改めて東へと歩を進めた。

第13話 洞窟潜入

フリードの言う通り、ランガルを出て半日ほど歩いた頃に紅蓮大樹ぐれんたいがその偉容を誇る姿を現した。炎を放つ枝の様子などは火纏樹ほていじゆとなんら変わりはないものの、大きさだけは別格だった。軽く火纏樹を五十本束ねたくらいの幹周はあるだろう。

「おおおおお……これはこれは神々しい、立派な大樹ですねえ」

紅蓮大樹を下から見上げて、フリードは囁くように声を発する。

シルビアちゃんもヤツと同じように、その大樹の迫力に詠嘆の声を漏らしていた。

「に、してもだ」

俺はそれよりも、大炎蜘蛛フレイムスパイダーの列が大樹の根元に開いた大穴の中へと続いているのが気になっていた。この中に餌になるものでもあるのだろうか？

俺の視線の先に気付いたのが、シルビアちゃんも眉根を寄せる。

「この蜘蛛の列……一体どこまで続いているんだろうな？」

「洞窟に入ってみればわかることですよ！ おおお、本当に根元に大穴が開いています！ 噂通りですねえ〜！ さあさあ、先に進みましょう！ 火の核は目前ですよ〜！」

ヤツは興奮気味に意気込んだものの、先へ進もうとはせずに俺とシルビアちゃんの背後へと回り込み、俺たちが先に洞窟に入るのを待っていた。意気地無しめ……。

俺は、なるべく蜘蛛の列から距離を取るようにながら、大穴の

中へと率先して歩き出す。

その様子を見て、シルビアちゃんも小さく息を呑み、意を決したかのように俺の背中を追った。

「ひっ………！」

洞窟に入るや否や、背後で彼女が短い悲鳴を上げる。何事かと思つて辺りを見渡すと……その理由はすぐに明らかとなった。

「……おいおい、勘弁してくれよな」

岩肌だと思つていたソレは、大炎蜘蛛の群れだった。びっしりと壁一面にヤツらは張り付いて、ぞわぞわと蠢うごめいている。

「サタンさーん！ シルビアさーん！ 中の様子はどんな感じでしょうかー？ 危険はありませんかー!?」

フリードが外から大声で叫ぶ。その声に驚いたのか、蜘蛛の群れが一斉にぶつぶと震えだし、手足に纏つた炎の勢いを激しくさせて威嚇しだした。

「っぐ！ あんの馬鹿ヤロウ………！」

洞窟内のひんやりと湿気を含んでいた空気が、一気に炎の熱で掻き消された。酸素が薄くなったのか、息が詰まりそうになる。

「サタンさーん、だいじょ………うっ!? これは一体!？」

洞窟内へ恐る恐る入って来たフリードは、燃え盛る岩肌……いや、大炎蜘蛛の群れを見て驚愕の声を上げる。

「このままじゃまずいな……」

シルビアちゃんは額の汗を腕で拭いながら、一步後ろへと下がる。確かに……このまま進んでも間違いなく酸欠を起こしてぶっ倒れることだろう。

「そついえば……！」

コイツらは俺の召喚した魔物だ……それならば、思念を送ることが出来るかもしれない！

俺は心を静まらせて雑念を払い、群れに向かって「静まれ」という思念を送った。

すると、ヤツらの小さな赤い瞳が一斉に俺の方へと向き、手足の炎が一斉に弱まった。上手くいったようだな。

「炎が弱まった？ お、おいサタン、これは一体どういうことだよ？」

「え？ あ、いや、ちょっとした魔法使っただけだよ」

「おおおおお！ 一発でこの大群を静まらせることが出来るのは！ 流石です、サタンさん！ 僕、惚れてしまいそうですよー！」
「お前に惚れられても嬉しくない」

両腕を広げて駆け寄るフリードを足蹴にして、そのまま奥へと足を進める。

フリードが背後で「サタンさんのいけずう〜」とかなんとか気色悪いことを言っていたが、気にせず進む。突っ込んだら負けな気がしてきた。

途中、何か所かで道が枝分かれしていたが、大炎蜘蛛の列を辿るようにして進むことにする。コイツらの行き先に何かがある……俺

の魔王としての勘がそう告げていた。

「どこまで続いてるんだ……この洞窟は……」

歩き始めてどのくらい経ったのだろうか。洞窟内だから太陽の動きが見れず、正確な時間まではわからないが、シルビアちゃんが肩で息をしているところからだいたい歩き回ったに違いない。依然として蜘蛛の列は、途切れることもなく真っ直ぐに続いている。

「も、も……もう……もう僕……ダ、ダ、ダメそうで、ふ……」

彼女以上に、ヤツはやバそうだった。

「もう少しで奥まで着くと思うぜ」

さつきから、変な胸騒ぎを感じる。殺気のようなもの……と言っべきか。炎の魔人とやりに近付いているのかもしれない。

「ここは……」

しばらくして、狭い通路から大きな部屋のようになっている空洞へと辿り着いた。

大炎蜘蛛の列はその部屋でようやく途切れた。分散したソイツらは、一目散に壁を這い上がる。蜘蛛で覆われたそれは、一面漆黒に染められていた。

「おおおおおお　！　見つけましたよ！！」

さっきまでの疲労した様子が嘘のように、フリードは軽快に走りだす。よく見ると、部屋の中央には半透明な紅色をした六角柱状の結晶が、幾重にも重なって地表からはえていた。

「お、おい！　気を付けろよ！」

辺りを見渡したが、炎の魔人らしき生き物は見当たらなかった。

……だが、殺気は相変わらず感じる。

俺は、敵の襲撃に備えて右手に魔力を込めた。

「おや？　何も……出ないですねえ」

フリードは恐々と紅い結晶に手を伸ばして、絶えず左右を確認する。

だが、敵が姿を現したのは左でも右でもなかった。

「フリード……！」

俺が叫ぶのと同時に、ヤツの背後にどす黒い　血のような色をした影がぼんやりと浮かび上がる。影はシュルシュルと人間の形へと変わっていった。

第14話 紅い魔族

「やっぱり、この凄絶な魔力……サタン様でしたのねえ」

甘ったるい声がこだまする。

現れたのは、セミロングでウェーブのかかった褐色の髪に、ルビ
ーのような深紅の瞳が印象的な魔族の女だった。

身に纏っている、申し訳程度の布で大事な部分だけを隠した、ま
るで下着のような朱色の上着はただでさえ大きな胸を更に強調させ、
深いスリットの入った同色のロングスカートは陶器のような白い太
ももを際立たせる。この露出した格好には見覚えがあった。

「お前、ローベか……！ どうしてこんな所にいるんだ！？」

「どうして？ もおう、サタン様だったらあゝ、まだ現況にお気付き
になりませんか？」

ローベは、俺やルシファーと同じく魔王城に身を置く魔族の一人
だ。

彼女は、艶やかな赤い唇で緩やかに弧を描きながら、鋭い目をさ
らに細めて俺を見据える。

「まさか……お前が裏で？」

「やゝん、詮索はなしですよあゝ」

「……っ！？」

ふふふ、と口元に手を当てて上品に笑ったかと思うと、ローベは
鋭い爪をフリードの首筋へと押しつけた。反射的に俺は右手を掲げ
て詠唱を始める。

「サタン様つてば、こんな場所で爆発の魔法なんか使ったら壊れちゃいますよお？」

「……ぐっ！」

確かに……洞窟内で大規模な魔法を使うのは崩壊する危険が伴う。俺はやむを得ず掲げた右手を下ろした。

「目的はなんだ？」

「それはあ……トップシークレット、つてやつですかねえ？」

「おいおい、ふざけるのもいい加減に……」

「やあだあ！ サタン様つたらすっごい魔力……ローベおかしくなつちやいそお〜」

ローベの爪がフリードの喉元に更に食い込み、そこから血が一筋流れ落ちる。

「おい、待て！ やめろ！！」

「ぐふふふふ、この可愛いお姉さんはサタンさんのお知り合いですか？ ぐふっ、ぐふふ」

「ちよ、ちよつとお、なあにこのオッサン……胸ばっかり見てて超キモい〜」

彼女は、苦虫を噛みつぶしたような顔をしてヤツの尻を思いつ切り蹴り飛ばす。先鋭なヒールがダメージを上乗せさせていて見る方は痛々しかったが、前のめりに倒れこみつつ何故かヤツは嬉しそうに笑みを浮かべている。

……形はどうあれ解放されたようだ。

「サタン、こいつ……魔族なのか？」

俺の背中に隠れるようにして、シルビアちゃんがローベを指差す。その行動に対し、彼女はますます眉間にしわを寄せて不機嫌そうに下唇を噛みしめた。

「……ちよつとお、誰よこの女は？ 人間ごときがサタン様に近付くなんて生意気なのよお！」

「おっと、シルビアちゃんに手を出すのは許さないぜ？」

俺は、シルビアちゃんへと歩み寄ろうとするローベの前に立ちはだかり、制止させる。

「ええっ！？ まさか、サタン様だったらこんな小娘のことを好きになつちやったんじゃ……！」

「まあ、そんなところか」

「いやあん！！ ローベのことは遊びだったのね……！！？」

突然大粒の涙をボロボロと流し始めたローベを見て、シルビアちゃんもフリードは蔑んだような目で俺を睨んだ。

「最低だな」

「サタンさん……同じ男として僕は貴方を軽蔑しますよ」

「ちよ！ ご、誤解だ！ 俺とローベはそんなんじゃ……！！」

「いやあん！ 何もなかったことにするってのね！？ もういいっ

！ ローベ怒つたんだからあー！！」

ゾゾと壁が蠢動しゅんどうしたかと思いきや、大炎蜘蛛が一斉に部屋の中へと寄せ集まった。

その、思わず背筋が寒くなるような蜘蛛の塊は瞬く間に巨人のような形へと変貌する。まさか、コイツが……！！

「炎の魔人だ！ 気を付けろ！！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！！！！

俺の叫び声の言下に魔人の哮りが響き渡った。

「ローベの可愛いアグニちゃん……サタン様の目を覚ましてあげてちようだいっ！！」

炎の魔人はその声に応答するかのように、巨大な黒い岩に覆われている馬鹿でかい拳で地面を殴りつける。その瞬間、腹わたを抉るような轟音と共に隆起した地面が俺のいる方向へと勢いよく向かってきた。

俺は咄嗟に後ろに突っ立っていたシルビアちゃんを抱きかかえるようにして跳躍し、それを間一髪で回避する。

一拍置いて、凄まじい土埃が宙に舞い上がり視界が妨げられる。フツと気配を感じて後ろを振り返ると、それを煙幕代わりにした炎の魔人が突進してくるところだった。

「何いつ！？」

炎の魔人は、胸にある紅い渦巻き模様から燃え上がる炎の火勢を強まらせ、紅蓮色の二つの瞳はしっかりと俺を捉える。ヤツは得意凶体の割に俊敏で、あっという間に俺との距離を縮めていった。

“ ライトニングブレード 雷撃刃 ”

俺が怯んだ刹那、腕から抜け出したシルビアちゃんが素早く剣を抜き、雷撃を放った。

それは見事に魔人の頭部に炸裂して、その衝撃で数歩後ずさる。

「す、すまない……シルビアちゃん」

「油断するな」

依然として土埃が舞う中、甲高い笑い声が周囲に響く。声のする方へ視線を移すと、ローベが魔人の肩の上にちよこんと座っていた。

「その身体でよく避けられたわねえ、流石はサタン様だわあ。拍手してあ・げ・る」

「『その身体で』……だと？ どういうことだ!？」

「ここ最近、身体能力や体力に不満がありませんこと？」

言われてみれば……人間界に赴いてからというものの、以前のよう
に戦うことが出来なくなっていることには薄々気が付いていた。戦
闘自体が久々だったから身体が鈍ったんだとばかり思っていたが……
…そういうことか。

「エナジードレイン“精力吸収”を使いやがったんだな？」

「ふふふ、そういうことよ」

くるりと身体を回転させて、ローベが肩の上から地面へと飛び降りる。そして、ゆっくりとした足取りで俺の目前まで詰め寄った。

彼女特有の淫靡いんびな雰囲気いんぴを漂わせつつ、彼女は両手を俺の頬へとあてがい、目を眇めながら唇を小さく開く。

「サタン様の精力、甘美でとっても美味しい……あ、勘違いはしないでね。“エナジードレイン精力吸収”は可愛い魔物ちゃんと互角に戦ってもらっために仕方なく使ったの。だってえ、フェアじゃなきゃつまらないじゃない。貴方の力に敵う魔物なんていないんだしい」

「……お前の目的が何かは知らんが、とりあえず俺たちの敵ってこ

とで間違いはないんだな？」

「それはどうかしらあ？」

赤い舌をちらりと覗かせ、唇をなぞる様子はさながら蛇のようだ。彼女は鼻先が触れ合いそうなくらい俺に顔を近づけて、小さな声でこうささめいた。

「あたしが、ソヴェルを元に戻してみせる」

「え？」

解せない言葉に戸惑いを覚える。彼女は一瞬、悲しみの色を瞳に映したような気がしたが、すぐにバックステップで背後へと下がってしまったので確認できなかった。

「ふふふ、それじゃあローベは忙しいから帰るわあ。アグニちゃん、後は任せたわよあ！」

彼女は現れた時のようにシュルシュルと赤黒い影となり、闇の中へと混じって霧の如く消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6218y/>

魔王様の大冒険

2011年12月28日07時47分発行